



貞享式海印録

恋旅名所
神祇毎常
乾坤時分
時辰季雜

三





貞吉武海印録三

曲濱(前)述

□ 海



本圖意ものゝか式を用寸其れ縁痕治部頭様
の文字を自ら書出といふ寸只南白の意は悪
あつた文字に拘りたるを度く一帯は他つて
意を自ら書出といふは悪い風持の花文を
此の二白より五白はあつたといふ先二白は
陰陽の及ぼさ定するに付文字を自ら拘
寸情を専とするを陰に白も五白を垂る
防ら必お成の難あり傍て一帯の妻化へ
拘るはよきより二白より仕るよりなり

▲強て字の原の法は任に流好なるもの好し
はれ強てするものを林ありて其門よりなる
とみ思ふは下よきを流す法とて見えよ

貞三 今の佐社も悪い必五白ありて古抄乃



りる疾の何まきへいき男社長の入あるより
似守化社い保の平洛より女子達の母も
もちて叱するもやくきまらあむむ野

第1の先はそれやと手紙

あそやあそぬ人の信れあて

弟の信去より其意あられも後の作者の眼
力より信りと疾の深信さ足けられ彼と
赤との二白と成て意を決て二白とらふべ
く風より一白持と心む推つるは是も二結の
意潤や又次の読るもあつる意あいは隠社
冷するあは意いんはあそが何あそこと

信去後昔の信五白の白とらふ意あそ何ん
一也といま守端おと守かくとらふ大切あつた
皆意あそ泥と僅二白ふはあつた幸とて初
て是中赤白稀く又多く意あそもあつた
叱るく一也不業はあれる意あそ出射ようむ

時二白とらふもあそ一射さうむ時信て射す
とも一白とらふ射すこととやいふも何卒意あ
もよく意あそ多くあつた一とらふ意あそ

▲意あそはあつた射の事とあつた意あ
て一白とらふ射す又意あそもあつた初
んのさうと去来何あはあつて初七は意あ
法い信するも今もけ又あつて意あそあつた

・意力仙二白とらふはあそ 意栗 ア ア ア
・白句二一白とらふ七八とらふ 意栗 ア ア ア
・白句二一白とらふの信 意栗 ア ア ア

毎意のまの 意栗 ア ア ア
十カ仙信て又あつたは 意栗 ア ア ア
信氏に上より意あそは 意栗 ア ア ア

熟意あそを関りよ志ああり彼万葉は
おそ 意栗 ア ア ア
あ 意栗 ア ア ア

され妹世のうの川あてもちろ人の伝通ふ中
云依もろくさうまひあむ毎夜のをさげ程
わい或い父子の情或い君臣の契を結ぶるを流
るふ彼流ひの迷るく又散まるといふ
へゆく道あるありあはる人よまたあはる
後はいて止まるといふ九字道の心は未だ
き時より其日の挽振を揃えて席はくへさ
わ出揺定り方と變りて居るの工持りて又
又持て又持てを守神教を著るは依世季
月世の配ま原更も油の寺といふ連流の心
あれい只後ぬ事あり或い懲り或い勸て又其を
矣寸違はるる浦尾寸是天理は清く正風の
波に如づくそそ哀多き哀種々の類席毎よ
著る之必古俗を概として已に拙き停よ
るふかかれさとして居るおのきよ哀せむい
いと止める方結ぶむ法の波も皆去るや

△哀三去

古今同 七ノ及多者

乃この恨を文よ虫をー 三翁
琴の爪をーむ袖乃橋を 叩得
髪おろす侍屋の娘表て 桐紫
面白の於女の杖の扱すや 翁
灯火風を思ふよ 四 得
川せやく警を角に結分て 紫
舟よとて女よ登り 翁

初秋ま 悲まをぬ男と 岩山
佗ていすろの傍のふり袖 嵐雪
を乞ふ哀の心を持せや 翁
目の強き先千る志てやりて 酒巻
お持出守札のきむらさ 川牛
女子をうりがお思 六 泣六
頭拂のん中吐一をん 徐子
おらひの先口之は惚初て 辰村

三
三
三

秩

十あつ古き卯のあつり牛
癩の患個下りて足せりう

三矣

死ねずとあててあつせぬおと
赤髪あつても袖ひく合息

三正

息する天窓よあつめ合
おらうのい悟りもあつて柏子抜

ムツ

世の良あつれぬもあつてあつて
頭博も僅は依後の江板

張

先博もめせん文子入
ん中ひたり待ててしう

△ 亥字面去 古おま

化

息の土手せあつるおまつけ
息の別あつてあつて人おあつ

古拾

神代もあつてあつてあつて
息所沼ふあつてあつてあつて

一 次

ひんあつてあつてあつてあつて
息衣舞の杖あつてあつてあつて

ムツ

息種やいつの相を賣あつ
舉白息を舉つてあつてあつて

、

大粒お目をあつてあつてあつて
息をうてあつてあつてあつて

息

珍そきい息とあつてあつてあつて
米藪のあつてあつてあつて

息

息すう息あつてあつてあつて
息の地務もあつてあつてあつて

氏

息すう息あつてあつてあつて
親父の習てあつてあつてあつて

息

息猫もあつてあつてあつてあつて
息投込息あつてあつてあつて

息

息をうてあつてあつてあつてあつて
息をうてあつてあつてあつて

息

息をうてあつてあつてあつてあつて
息をうてあつてあつてあつて

△ 非息字あつてあつてあつて

猫麻糸のあつてあつてあつてあつて

意字の意の戯を嬉すその嬉の意を去
あんの笑生笑用の意字の嬉をぬけ

・意字する麻ふ角の丸あき守 一才
以るかの果乃小袋極う 之伸
さうとん 候拘せきよ 朴人

△意を流るんは

小文 秋社の文て床とも傍とも 史邦
ひ秋社の月草のうろひ毒き若法師の振
浮れて一枚の意よ袖をひらひとて

百甲は又舟のきぬく 翁

振とて舟と流命きぬくと作るの信の意よ
信とてさる作る舟の工支之信信陽二の意
流るれも又信は未信信も舟字を流る
よ六船及の湊るよ彼就志の契と結しを
思えうぬ吹風よん片帆よあや振とて

批判し土佐村木の行兵 伝水

村木樓の舟長といえて志れお依うろる
室う船なるも又変化の意を流るは乃
師の潤るれもやと力を入るるも白は意の
おるせむい次の作老の拙むと又師の用を流
何んぞお依村木とて四角ふんは集るる男の
彼お局を指あの方をすそわつまとて
棧の意流るへきたるよもあく伝家のけえに
えて思れよ意ありとて

意も流れぬ中へ生極云 邦

とけり九尺始意をあら次に別意下足之
三の備意と書けりは恨意正の初意正の他
意とて嬉意八の意九の初意十の契意とて
振とてくよ意流るを替へて振向よ老少男女貴
姓強弱文質意実を分て流るくけりる句
千句といとも変化白をあら

△哀を扱ふは

凡哀を張るは面白き哀法ある限之候令分合
ある面白き哀法あるは面白き候は
ある面白き哀法あるは面白き候は
も自然に人皆さる法を多かる候は或は縁
あきばは後と張むと或は縁ある面白き
程は引て面白の本意を失ふるあり等しい
己下は挙ぐる哀の終の旨を考へよ

△花は張る哀 卷〇月 七ノ者

花は恵を仕るは法かゝ制する古武之控門
まさるるあり花は仕るあり花より起る
あり花を起すあり何れも一花一白

君丸。おの月も恵取まき出られ 夏花
花は恵 哀より情のつぎは 菊
△海福は時めく世の情より ソフ

は哀の哀ありてすむ不われと制する候は張る

三匹

おれは煙の草と云ふ哀 支考
ひろくと内をわきとや 及朱
このきては哀なきと云ふ 竹菴

雑

○身を平陸し思ふおの月 一舟
言ふをよむと白乃情と 千化
酔て吹る梅の下より キ角

衣

○月むい男ありと云ふ哀 乙抄
奈落もさるる情も法も 柏如
頭博の二字は法れむなり 茂林

弄

情ありはの袖を引さく 菊
冊子の字まよぬる巻目 文州

拾

花は生きたるをわきと云ふ 菊
号瓶より 媒乃声 杏皆

桑

きりくをよみし哀の巻目 支考
哀の髪をよみし哀の巻目 支考

箱

箱の後の安のおもてあき 正去
箱の中は能く入りそや

豆

豆の袋と衣を月と衣 少風
我人も束の出代の衣 系水

今

今あるはちりの君も世の敷 花と
樽と柳の何れも木

丸

丸の巻居席の巻をとり 氏林
あまのくえん 君仲

お辰

お辰のものを眺めて 乙女
人の足は角おとす麻 小去

拾

拾はれたるもの新所まで 衣指
又いあるく 柳山吹 花吹

角

角の巻居席の巻をとり 葉云
ぬめりな巻を去きまき

白兒

白兒の指子母は成て衣の張 占後
山吹おれて三人乃衣 キ角

白兒は始て衣を巻ぬる後あて不興ある故

之はああるよは衣付あれ奉は苦くし寸

△竹青

尺竹青は君も青のゆき月あすは衣は
月あすは打散り子細あり又竹青の月
ト作らるるも顔はよりて衣あり

いとをき人の文を引きて 不知

栳白

一般の面を付くあり 花
竹青のうきをよきも思ふも ぬり

○葉の月の さき 花板

角

○姉妹衣の袖月と月と又て 衣位
衣を竹青の付く 白桑 知足

○葉ああせの衣に投入む 衣
指あつれし衣を 得し 已百

葉

○横川と月のまじりの中 衣
△葉衣 多何者

たまたま古粧は長きく作く必今ありき約

をきこふかれと祓れりさうよを世の白を
又くはる毎に相更われと嗚の度と稱とあり
唐流相扱の發より自ら泣きむせ良る更と悔き
今更の仲若杉よりけり牽及い平を暗り夜日
別扱の後合嫁入るる根引別更の立引
起し伯父の更えも穿入寸果の期南の更の欠
為るもむせも浮世のさかぬれい文人の落ゆく
云のそあすまきりも他徳をんはつるそ
そ意の中情も休き人あむむ

難 歌く拍子ま字もろく 佳六

は清く扱女の化粧初やあるまをほち歌く人の
必別傳の書あれとさすうえ乱るる定谷を孤
とむ信は更も理の底を打扱し文人と
ふよそ見扱し更人の更する初を信て

廓へい来はる寺列女傳 竹石

とけり更も妻の更を看るま廓の信動され

い列女傳の人扱ま扱扱の扱女を射し彼扱出の
扱女ま扱扱をえせとやと西流も信を更後して

菩薩のまササとわく 柳柳

井人あきらの冠を合る略字うて彼扱果の
尤も井さく大和の扱名はわきて身扱あると
とあ白へんを扱せり又一更せ看るまササ字
扱と出されい更もは押初と更及の口拍子と
えと井はさくは采ほの口合はえはは大杯を扱
太も扱扱を載て一更とをや寸初を信て

歌も成ほりも筆一采の更 糸角

かく扱より白廓を扱うて妻化白を之
かる白法を信るけり言文を扱うて今白を更
法更を扱して三ッおは徳むへー

冬

雪の扱果のふれ更扱き カ号
杉ま言扱る斤袖をとく 系
化人と扱を扱は吹布きむ 系五

夕 子に中人田舎ワケハ ソラ
子に中人田舎ワケハ ソラ

を世に二不守射ハツ必美意と定一人あり
神は神依の妻也を分むよしの哀を言方言
くむ飯令一老を悉た望のさくそもの白梅よ
変化ある何の思婦ふるやあむむ

根本 笑歌よく世自慢の一息を コ弁

七五内 舟におかしく 糸あきあき ソ弁

頁三 せし 夏多の仄と二折しん キ弁
杖直忠務の衆を携きくむ 才九
きぬくの衣着きくそ佐 弁
いふまきんはくらの人の證一や 弁

頁四 相女ゆいあしきくしきり 唐風
情しき力の美合の折てより 弁

頁五 志のくの乱痛 百々い 角
浮世とくさ回竹を存しぬ 丸

や三尺五と陸を白糸及妻化いしし

△ 万葉

今世の唐人のけん大方子中座をききさくさく
幸苦 宿是世 耶南の作 伯又宿る 村めを業い
原なるち子やう二二の反利木に押さるる

友衣 くらをさあまのあの本乃風 善行
秋の木の折も今こそ川 向 七々

是作ののうきまはるの力のあをきほ母の生は
あしき勢力を居て救急の便もあしきあま
歌のその度まの折くか合む時の風あや

七三三 坊ささくさくいそんくよも 一才
巫女を法要莫作とよと一 源ト

坊ささくさくいそんくよも 一才
巫女を法要莫作とよと一 源ト

報 葉はをを人の指を石連て リト
ころくの事き 忍あふキ風
待者のふいそるる葉の中 石
たよしひきのわうさの声 仙化

△男之

男之亦手柄まのくらの表裡よきしりきりとき
あつて其情哀しく作るへー

ほ

むりーむりー治席あつする 許之
きぬくく男の踊の泊をきて 踊

浪

灯の楽せーる借社妻 ぼ菱
治席の教り抱ひくしる 小人
帷子と秋のりきあきめきて 市仲

雲

美尻の念志まんとそ袖乃高 釣壺
踊の声をよその 必 蘇 ぎ冷

祇

小舟渡り一博乃う所 去来
云分のちんくくと起る衣乃子

長良

燕土の重んずれむ甚生 呂杯
合あう留まら張るの程おて 相壺

仇あね

古登只初さる 衣乃とく 位後
治席持せ致乃ううりき 位事
△乞食甚

古拾

室せの末葉あつてワ弁 千葉
馴てやき乞食の妹せむ博 位後
号りて草のきぬくく 踊

枯白

小麴の傍ききぬくの月 高丸
拾の意のまて見ませ見 支考
と人言と成て又ぬくく 踊

赤掲

さ向るせ中の方をあね 産丁
菘いしくまらさき喜む 可柳
と人言の悲乃通冊子ある 踊
海見のおもひ日 徳川 秀奈

△盗人恋

七五者

春掲

鳴子おとろく行敷の陰 釣雪
盗人へ連そと妹の力をして 踊
祈りそらぬ冥の 神 ソラ

甚

古七の月さきくる水あれー 已百
おろくく笑る盗人の妻 梅厨
涙よりあつとあつと養をく 考登

笠

秋の取あぐ乃、又、洗足
笠人も、意、忘、て、袖、の、意、采、冬
ま、把、の、口、ら、乱、れ、あ、う、一、廿、二

△老の意

老の意、も、信、守、く、ん、や、ち、や、あ、き、執、も、あ、う、と、一、五、
ま、う、一、の、杜、乃、を、思、う、方、も、あ、う、一、

藁

神鳥の丈夫、袖のぬき、き、ん、て、
老のち、う、一、娘、布、一、く、一、
僧川

人志、守、守、志、う、が、天、意、一、神、一、ち、う、
意、足

意、足、と、や、う、お、情、志、き、ぬ、
、

音

緞、重、一、疵、也、も、有、る、と、う、て、
り、取

後の、女、房、一、手、履、寸、一、
鼠、枝

臣、君、一、ち、ち、と、美、と、う、て、
伽、白、史

未、初、夜、も、あ、う、ぬ、一、む、の、書、ね、好、
由、之

△後家意

一、及、や、ち、一、及、人、の、姿、お、う、て、
ソ、ラ

目、大、お、う、目、一、お、ま、も、う、一、
素、英

拾

枕

泊

教、足、一、お、う、あ、そ、て、の、お、
奉、白

秋、風、一、時、の、状、を、出、ち、一、
湖、水

雪、冥、柳、一、宵、く、一、の、中、
青、井

雪、冥、一、云、沢、も、あ、ん、髪、結、て、
大、腦

男、文、一、一、糸、の、
三、井、ち、
柳、路

後、志、一、き、き、一、と、初、て、き、
玉、白

祈、り、一、あ、守、の、言、一、き、う、て、
葦、小

後、家、の、痛、乃、行、一、久、の、ろ、
林、坊

お、愛、の、小、袖、一、ち、き、一、と、あ、う、む、
支、考

木、有、路、の、ち、一、の、文、一、再、
相、之

古、君、の、や、り、手、と、あ、う、一、と、あ、き、
キ、角

戒、心、一、き、う、て、あ、う、
意、人、
占、意

報

雪

意、原、州、一、志、一、不、帰、て、一、
李、夕

意、原、一、志、一、不、帰、て、一、
李、夕

の、く、る、る、風、つ、と、古、志、を、必、や、
意、原、一、志、一、不、帰、て、一、
李、夕

那、の、伏、を、う、て、意、原、志、の、姿、を、立、て、
久、一、め、う、て、を、ま、る、と、一、
甘、房、也、
私、意

と行くよりさそ一変を揚すうむをねるい桑花
あきい又亡入いそ末末と葵し中とえて

ま向のお乃けうぬ中 南紅

枕白 ひろく娘の冬乃あらく 仲子

若く男やあふ引てを梅の腹あふ懐む人
のさそあむむ早島田の宿あふううさきも
ぬぬ冬の時と又他人の詞を作す

若木の刃を隠さぬ思きて 伝水
とけくう伝あらの志をきつめて准る若木の

次めさきこころを井あおの親登りて又たつき親
を更きもさくむしおまの嵐の哀を怪て

候くくむ標なるし 若

とけくう又杜の親おと又甘の宴情あしむ

△ 傳恋

傳の恋旅あふあう只何とあく作あつむむ子細
あし傳傳を若す件のもんあきいあつむ

山琴 ちりやけきてすくぬるう 柳士

き宮住の中よ力をたう甘さむの初まほ杖文
てれけをあうして今さうる乃乃うてま惟も
若あむさあふ彼重毎のう環作き女と又五

男麻さく思あうぬる木履 喜次

麻と山中の揺あれぬる木りの人お博の程山
居甘中の世れとえさるう又傍よんあう男は博は
空門除あう何後の法師あむむ又持の勢を述て

若傳あうくさそ草草 巴弓

と信跡の情と他より乃るう作もホソ

本お 刃の思乃さくの勢とや 麦士
けらの姿の多思勢とて持て口合する物あつむ
あつむ後の傳あき先とけけさえあう又女と
けけさすつきさう通人のお合と又て

折行に於けささる思きて 壺平

次もも字を替て衣りれさも後うい俗も始と

又々又たこころをしのの歌とよめて

扇を扇すけおの留る 涼之

とくすけおの人の記念とや

初意う又くすもたたくし コセム

口をきんて傍の 婿く 翁

枕灯を扇せしおのむすき 享子

地とすもく(聖)のふり袖 ソラ

五人天台坊と きめきて 石乘

ぼり又り侍美も十八九 五桐

扇を扇る 邪淫を語も 午御

約りこの事を歌けし小性衣 辰化

糸子とよきのこすりの意 支考

一島いほ二之意 什り 万子

三島のあちこち味子比丘尼 呂凡

字をの物くまひとせき松 化

あれりと下を笛もあまふ 旅徒

△癡心歌おま

印

你

り掃

了

莖

白扇

上

句

仙家

一まう

為相玉の髪きる女髪子束て 卯信

燕を尺破るお虫の月 三翁

衣とて種念山の真你一 零佔

去ある夜を白く 風葉 三翁

笑く教生はくおうきよ 秋人

尼はあへき方のきぬく 口通

月影は日暮とちを透て 三翁

忙り又すりし燕の豆葉 辰村

撥まろりと候つれあき 許六

尼はあへき方のきぬく 木守

△三をあしお

は乃月後美打の口振白 三翁

隣の内女おあ乃一奇 修孝

はさむ息のめんの袖栴 杉凡

思のけりし果を合意 三翁

菓刀の芝は根いそすま 凡

後美打やお振乃ちあ 三翁

△下女恋

氏乃の法と汲言此世の表あれも最ありす
 九ひき上品の意情いんまぐ体保く哀は依は
 昔お洪のきこ葉なき上の種こも海のぬき
 大なる姉の乃まてそあめれさるを世早の初を
 きて依情をよむい依忠のんあさまあむじら
 八夕 際雲よ名吉たの敷乃殊わて 之川
 コハの夜三そーユ余いなるよ方を持ちまして
 花はよゆきく似るある孫も定守あ一人ある人
 一馴くき女ト又きてあ一人の情を作り

松の成す持る意もすら子 才人
 只頼初名の抱く下女の情を流るる海よりきぬ
 古人大方二句も止りさるを次の作志の思を
 ようなる書き守女情は更情を二変して
 登志のふろくとおを只初 手
 と行るいありもあふもと仕そ一化松は情き思の

うらう下と末の松山の体教むはま六女始の
 路は松の枝もひて袖も敷るも流去のそりし娘
 身あき妙の哀なきもかく作の付いと云あそ
 原氏き衣の情を流るるもあふくをう

一夜
 歳月の小松ももらも隠守む 三羽
 とくと思根の下女い言す 似去
 得はあめ情をたてぬき 羽

次句
 竹の戸を人まんと母も持きて 才凡
 おそ保る恨とくとよ 羽

松白
 際なき一妹をあつと今来す
 胸くくるを口いてはりり 昌碧

你
 よあまき一胸くくる麦の形 飛
 る士をまら哀つき丹戸のそと 西巻

返書
 目取く髪を洗ふか片かー 許六
 又る手帯も傷ま 一枚 先放
 君いあつ我はすくと冬の末て 去末
 又候撫のあふさ乃哀 支考

△幽霊といふ哀

三匹 白々まといとて幽霊のさごと 及朱
白りけい身 裸身をさらけ 女の情を指と足立
りあみけ付 面目を失て 行差
やんぼろ情をさるる白い次ま 冥人よ 向て吐き指
とるる平定法こきい 化人の冥女をあらさきま
あむむいけ 方いすれ ちるお乳の人と又て

乙由 幽霊い木りをまゝに杖にひて 丈志

コなきき刃の志方と成あうる 煮の粒もひきま
ぬお毎くの通路を哀々人の眺るる指と

山中 新茶古茶より 君ら一云 由
冥人おし先お茶と指出すをまうも九あくま
よかえ茶よりも 君ら冥と戯るる冥指の
大志の指山とて 冥あい出入の冥志あむむは母

えよりとおあれいりさやどの付さうと行な
つゝおちを傍より 無する指と作り

新茶より 冥指の哀をて 涼ト
おし茶より 冥指は初として 冥指の指
冥人冥人の心根を明とさるを次る指と
ある化哀のまねく 冥あー指とえき

お乃乃候 面目もかー 指妖
とけさるい 加しきお指とさうさるを定ふいあひて
おちく人の面目あき 冥とえさうも 冥指ののつる
指さる月のゆく 化指さる 冥指の入りあをの指
くおあの化を冥とて ああさうも 二はおり
来し 冥もおあ鳥の声よ 人目をわけて 己ら
はよちさうる 冥指は衣の白く 冥指を作て

幽霊の階子 冥の白小袖 冥白
山琴 冥人 冥の冥の 冥の 冥仙
冥の 冥の 冥の 冥の 冥の 冥の 冥の 冥の 冥の 冥の

は怪きおまゝに床入を物置にされてあやうを足
るゝ戸口をしく押けて次の房にすんと入る
伏せ書き白く冷さゝりおの毛浮ちあゝ息を吞
て襖の揺子をゆるゝ女同敷の房を敷して
お清の振さゝり幽霊あゝやれらあゝの御君
お捕あゝあゝと床をい座敷の終に抜出ゝり
あゝするはあゝ人の才文を以て後あゝ後合する
らむとあゝあゝの町をき法々の寓居の白下
一字の哀情を用き你文のおまゝに幽霊は河の
海を立座おりまゝ出 体と又せ二りの房にま
そめ哀を合さゝり仍令あゝの情と一字の海を
ちて作の付らあゝあゝを後さゝり以て座をあゝ

△若後同敷向の哀意を付ら不苦

ぬ娘又分ら哀のいち子まき 嵐雪

小系更木そめをさすんらる キ角

味崎さすを茶のさすさす悲い 男

今うむと云へるゝ床れて

火燈をい出さおあすりう 角

ぬ娘又つくはえより又今うむさ姿の女
あゝいふは小政は白帯して髪もさゝりま
小系めい振らむをさすんら又さる人乃
只まゝに振らむはさすんら用をみそ焚
と又立白と袴の中よりさすはよおをこの男
の姿をあゝあゝとれてはさすんら振ら後の
床に全竹恋あを次は竹作の恨とさ何れ
まはて来て冷きさすり守あゝあゝをさせ
るも海をいと戯れ笑やまゝいさゝり何れな
涙とてお眼は只余とのお家る振を付さゝり

拾 悲い戸を閉くひて板をまね 氷水

戸 妻戸をくひておてさすぬ 花

你 伏すの姿をい入おさきく 曲琴

カ子 行かぬの姿をいさゝりさすぬの姿 柳

死うとん契ふくもあ大子 凍ト

今又候 男ちく生 巳白

小町あれ山姥あ井あり 乙由

赤ん小神一巴山の井 由 白

月御う御う喜まなかり

誰方のよも哀れせお 乙由

業平も膝をあきう衣 水考

け子のよも尺十の 老乃枝 ト

ちんと悟りさせて足せん 昨古

きのおの形うつさもおん 先放

てんうが後い思の極とあり

乃まきてまの志れぬき思 枝考

きりて来と教子れとおん 厚わ

ききて医ねるけんせん文 号考

らんりつぐ文をききし 号考

玉まの袴より歌く思草 支考

傾博の文すうる樹 月 信凡

申名

日

後考

思

ヤウ

夕

文

真

教 舟

否む子哀れ沖の舟舟 其考
つらぬ舟やりんき仕置 其考
△哀の書

後考 眉押の書うけの自家 巴凡
まふ 昔清と帳の裾とく 仙化

表 小頭博りてあむまの書 其考
改巾をうりよ飯の燈お 侯石

コハ白揚のききとけい為伴の書あ後の花
よ句あり昔中 哀二三み出てる

白 我や来ぬ一秋昔天の何 嵐考
久とりの夜表又よ昔白 角

花の宴の宴の宴の宴あり
奉 之敷入室の面をそらぐ

初意のむもいそておりり 葉太
もねの恐乃君もそふ枝 独

西条おふくも 花の斗
奉 榻をきき子貴れり眸

け二倍い恋のくけ続さう

夕友藤下針立きり恋の尻 秋之

新 暹羅草より恋の袖笠 寺角

恋 夕下りの恋の袖笠 新 寺

● 夕下りの恋のおわろくし 寺

コお一折恋続後一折恋続く

△遊恋句

白 恋は煙をたぐり物色里 糸

白 松のつらな母子ひくく 胡布

浪 頭博の果名髪は金入て 其風

浪 服うあやう猫のせりき 恋

洗 月をま青小袖の袖せま 恋

洗 夕の情を 出代はあ 恋

あると恋あふすと又て孝の情と郎さう

林 若くは女中の供は 雲 恋 七

林 矢おの八卦の恋をえちうく 七

若き女の髪ぬ束束さう矢おの占めむは又易

老の子合点し侍人を尋りさうをむさうコハ
けあふと人の恋と忍入しをば作者の恋あふすと又
かくけう一屋を移せり由る白き長髪と

あらしくは矢念は白き村さう 伯楓

林 娘入きしむて暮しの口 恋

林 八卦の恋を向く所さ 蓮二

林 恋のこて アら 恋 行

林 若のくまの二世さう 恋

林 恋をく又さの風の次ちし 仲志

林 恋をく又さの母のまわ 有琴

林 上ささうりよ祈伏さう 梅光

林 恋をく又さの後のお忍 雨

林 恋をく又さの洗くくの空 雲

梅十位十カ仙は恋あきかゝる句をば号は今うる
恋をあらうけあふと恋をあらうをば号は
若のく又破れあふと恋を合さるるは号は
こけさうて恋あふさう

□ 旅伴越不遇三巻 吉三三

旅の心は憂ふ事おのて夏趣や寂と至と守乃の傍
りも旅はあれは東海乃の一面も程さむ心風
旅は足来なき時とわらむと宿屋より料理
んは但ぬ身お中の清水汲て飲めし他人の旅
情は疎きくま母の哀情は涙きよもやはし
くむさく去極の氷辺美極木の傍に宿し

ひき 丁也く方や白子 若松 翁

ひき 子アよむむの盛乃一乃田 孫成

ひき 吹れ死る 乃の師を 曲水

ひき けは室より刃をうれらる 口通

ひき 又出て来む便乃うみ盛 翁

ひき ぢいゝ旅く 名なきわら 白き

ひき 乃乃地務し 柵うもや 歌生

ひき 入おし邪の声も 鳴交 ソラ

ひき 舟を直る 空年雲の舟 小枝

ひき 何の用やら 子雲うもく 有琴

梅

今の世は西の世とて月の日とむ 梅光
旅りの内いさぬまきふ 七巻

ひき 旅人の乱きせく 去くまて 水

ひき 佩もおもえぬ ち刀の鞘 翁

ひき 月まきて 仮の内裡の司百 歌

ひき お引の紙方を ともひきりよ 因入

ひき 款の門は 二枚藤うたり 下

ひき かしらも 憂い世中の地務そ 呂丸

ひき 連なり 小乃武士の仮務 木守

ひき 旅の中 どのそく旧泣 許六

ひき 妙系こそ 雲空集の度る 千那

ひき うき旅の 世を時とて 去アお 千梅

ひき 旅の心を ありあうまうする 千梅

ひき 梅廻り 旅を行く 世の去 那

ひき 夕ノ鳥 宿のせきと 旅つらん 千角

ひき 旅人の 足とを 有し強力 旅人

ひき 穴一より 打ちし 子梅

冬 旅字面去 カコニ 古ニ去
 杖の以旅の山を尋いとくう 三羽
 とし衣箱より取りおしお 羽
 去の旅をたつあつむ襦袢て カコ
 旅衣あまそくを扱やうて 笠
 旅衣店引て茶も 屋呑 茶推
 山にたもさひい 山り
 旅をそまきそけつる方ニ キ角
 山の丹のんをまねや旅のけ
 園子も世をよちる旅 列 去書
 五月るよ納もまき旅の旅 何程
 うき旅やうき旅の幾程 西去
 〇名に 二去 頁ニ去 多行皆 〇
 九カ仙は名に園名地名未合て六七はあつ一
 去の月日五回の名ニ去又出るとは旅衣を
 京おとするあり旅衣の衣箱懐古の幽情
 雪月花の哀を記せむおさるを御衣

冬 旅字面去 カコニ 古ニ去
 杖の以旅の山を尋いとくう 三羽
 とし衣箱より取りおしお 羽
 去の旅をたつあつむ襦袢て カコ
 旅衣あまそくを扱やうて 笠
 旅衣店引て茶も 屋呑 茶推
 山にたもさひい 山り
 旅をそまきそけつる方ニ キ角
 山の丹のんをまねや旅のけ
 園子も世をよちる旅 列 去書
 五月るよ納もまき旅の旅 何程
 うき旅やうき旅の幾程 西去
 〇名に 二去 頁ニ去 多行皆 〇
 九カ仙は名に園名地名未合て六七はあつ一
 去の月日五回の名ニ去又出るとは旅衣を
 京おとするあり旅衣の衣箱懐古の幽情
 雪月花の哀を記せむおさるを御衣

わ	大和	さ	り	赤山	又	浪	牙
木投 <small>ま</small> と <small>さ</small> む <small>か</small> 山の竿 <small>しのえ</small>	あ <small>と</small> 出 <small>で</small> て <small>う</small> と <small>さ</small> あ <small>さ</small> 苦 <small>く</small> さ <small>せ</small>	其 <small>その</small> 後 <small>のち</small> 磨 <small>こ</small> も <small>せ</small> ま <small>さ</small> す <small>た</small> 後 <small>のち</small> 山 <small>の</small> 舎 <small>の</small> 仙 <small>い</small>	<small>△</small> 之 <small>この</small> は <small>地</small> 名 <small>ふ</small> 名 <small>何</small> と <small>知</small> り <small>ま</small> す	<small>△</small> 之 <small>この</small> は <small>地</small> 名 <small>ふ</small> 名 <small>何</small> と <small>知</small> り <small>ま</small> す	又 <small>また</small> 教 <small>を</small> し <small>て</small> こ <small>の</small> 使 <small>ま</small> き <small>く</small>	伊 <small>い</small> 賀 <small>が</small> の <small>中</small> 乃 <small>を</small> 村 <small>の</small> 川 <small>の</small> 旁 <small>ほとり</small>	牙 <small>は</small> の <small>前</small> 乃 <small>を</small> 村 <small>の</small> 川 <small>の</small> 旁 <small>ほとり</small>
風 <small>かぜ</small>	仙 <small>い</small>	之 <small>この</small> 仲 <small>ごのち</small>	仙 <small>い</small> 呂 <small>り</small>	衣 <small>い</small> 冠 <small>かん</small>	ヤ <small>や</small> ハ <small>ハ</small>	足 <small>あ</small> 村 <small>むら</small>	有 <small>あ</small> 琴 <small>も</small>

△国名二去 大和名曰

新	炙	戸	君	冬	心	雜	系
そ <small>の</small> 田 <small>の</small> 種 <small>の</small> さ <small>の</small> り <small>ゆ</small>	火 <small>の</small> の <small>田</small> 種 <small>の</small> さ <small>の</small> り <small>ゆ</small>	つ <small>く</small> し <small>き</small> 人 <small>の</small> 娘 <small>を</small> 石 <small>を</small> 連 <small>て</small> り <small>下</small>	り <small>う</small> ろ <small>う</small> ろ <small>う</small> ぬ <small>依</small> 反 <small>の</small> る <small>を</small> れ	因 <small>に</small> 幡 <small>を</small> つ <small>り</small> て <small>又</small> て <small>ま</small> き <small>を</small> 登 <small>す</small>	は <small>ま</small> の <small>使</small> 乃 <small>ひ</small> と <small>名</small> ま <small>き</small>	鳥 <small>の</small> 城 <small>の</small> 表 <small>の</small> 玉 <small>乃</small> 占 <small>め</small>	白 <small>の</small> 糸 <small>の</small> 白 <small>く</small> 坊 <small>の</small> 月 <small>と</small> 見 <small>て</small>
朱 <small>しゆ</small> 弦 <small>げん</small>	支 <small>し</small> 考 <small>こう</small>	柳 <small>りゅう</small>	席 <small>せき</small> 月 <small>げつ</small>	百 <small>ひゃく</small> 卷 <small>まき</small>	方 <small>かた</small> 木 <small>も</small>	五 <small>ご</small>	

△名は赤山系... 地名名お赤山

花はなのまひ古きおの町造ぞう ソらハ

まとを所々ちるまの名 為な

毛けのさやたらく浪なみ花はなの貝 小こ枝えだ

まと協の海うみありまり者もの女を 小こ角かく

けがあら目めまりの白革かわのたび 占ひ茎ぐさ

噴ふんくよ系けいにおおりをもちまりて

月をを紅の宮よりこすり 支考
あいらりりと帝猫さうり 丹也

・横塔をさるとさる夜出る 空芽
後路は底地の行くあれも地名あぬたふ苦

有れ名・夕月の街いあれと街客ち ソ介
かも 灯籠の尾の端をさうひと 赤ち

三夜もあゝのたの久一才 意作
おちあを西へ清しん 灰洋 柳士

・怪俗節のきりー 雪野 昇南
おそもあゝ言ゆの傍の秋意は 涼三

・花も咲下ち所いちり仕也 花把
夏大根の 柱い 逢春 成幸

・さやう木もこの聲もさうる 比波
ふしんのけうの今よ言青葉 杉丈

いせ海の飛を中ちく貰れて 百采
有 ち所のそさう珠敷と能る 李門

百采 ぼくすあてたをさふつく 万州

・都もさうりも家て志さう 一橋
あゝの葉いあゝあゝあゝあゝ 乃九

・あゝ合井戸の傍よ過ぎ 白根
おのそのけの傍いあすしん 有良

・おろけいもあゝあゝあゝ 一也
おろそま木もこの聲もさうる 一庵

・洗くくのき紙よ小念地なれて 麦林
妹の衣を 姉うみ抱 倉原

・上をさきくももせん根花さう 茂林
江戸清あゝの山を代家く 信風

・さく花よ朝も咲くさる夜まて 考
小念の空をさうる丁うひ 凡

・んよん足美を何さ江戸祝 松棚
入道の世をさるまー系さ 可昌

・さるの画図を持山をいうせむ 登松
言路もあゝあゝあゝあゝあゝ 冬松

・只をささう師の山の杖 佃房

号

伊丹屋、李白ついで、唐の月寸松

・玄木屋を建て足れいせい、素丸

七

りつちろくを撰て出る事、甚之

島原くはく出揃一、付、長水

世をみる今乃山博の系、り下

秋

かちが櫃斤机段、志りき、改定

か

君仍和、会稽の聳、キ角

・耶那の臣十九子も猫の紋、素系

十七

セとき亭ちやう後、五云存、コ杖

る姓の御、むのま、の山、有風

雪

・黄らつ雪、賦詠のおあ、風州

・節述、怯、雪の八、る、ろ九

・唐云の花、の、の、とあ、る、李夕

・ま業、移系、小倉、常、ホの名、おも、賦、若、う、る、き

蓬

△系と初、面去、一、屋、マ

・才系、紙、二、初、の、ま、牙、出、付、り、翁

・お、り、人、海、系、の、財、と、占、り、二、山

系

・玉、う、二、初、河、乃、斤、山、家、唐、仙

・始、も、連、り、一、度、の、系、系、

孫系

・の、孫、係、き、初、松、枝、は、二、茨、う、て、不、角

・雪、の、あ、ら、む、系、の、ま、ん、一、僕、石

萱

△お、玉、名、面、去

・瓶、表、の、聲、声、を、き、際、と、才、を、使、て、翁

・言、葉、の、録、一、白、田、作、て、桐、葉

一橋

・孫、系、上、の、の、風、雅、を、志、さ、る、キ、角

・夜、の、又、よ、め、ぬ、ま、を、お、や、り、て、ソ、ラ

一橋の風

・床、は、お、お、親、人、の、圃、乃、月、翁

・お、二、三、の、係、持、り、さ、る、あ、ら、ま、先、面、去、と、あ、お、く

△玉、字、面、去、吉、六、お、去

戸

・舞、う、舞、い、何、の、玉、う、う、う、ら、る、喬、谷

・又、た、玉、の、下、領、を、さ、し、れ、

素秋

・味、ま、り、く、屋、持、り、る、玉、の、初、吟、山

玉

玉のあはれやうへく

玉名を玉に傍りく

玉のちりき玉のちりき

玉と玉名

白

白の玉のあはれやうへく

拾

拾玉のあはれやうへく

白

白の玉のあはれやうへく

市

市の玉のあはれやうへく

山

山の玉のあはれやうへく

玉名は玉名にけり

玉名を玉に傍りく

玉のあはれやうへく

冬

冬の玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

玉のあはれやうへく

你

你草の女そりの下登りき 西平
伏元のまを入おききく 曲水

浪

矢さりの舟いよんまね時 素拙
木舟得いあれとや若る橋も 橋吹

和

碓氷の橋本順の 改方 英事
朽く末合寺 柳さきまの葉屋 小枝

後橋

比のトのつぐき高防磔井 呼獲
子屏の拍系とやうを解 白あ

白鹿

鹿舎の角と下又りん り由
比度い母の乳乃乃正山 許六

鹿舎と又あうさうい立まうさき用とえて比度
えとけうう行るお白さうて万化あれとも
皆あうさうあて只並むい拙き限あむ

□神祇二云 古八云 〇

神祇を系ねとすう内因の上代と系ねめて
陳の乃と誘ふ後あるを今の人さうらう
神宮の次い押動化と清り名居の陰の橋の原

你

那智の山も去はす空 嵐
町中の名居もきんとい 翁

誰

お月あくのいしするあ 才丸
祈するおあの中を押し出

棒

さあはひ今うとあうさきあり 七石
大木に又えりも宮の小さよ 仲志

お

毎年の社いね。いね 杉風
さんむりと名居もあむの中 子サ

カ仙下

梅てあうのおまをわつとる 風
斤あ木の末社い横に物あ

カ仙下神をう出て尺生れり尺もり出て神生ぬ
もあり神祇の派白りきあう多あうあ

百味

氏神のむも盛るう候 持 支考
おる 名り并を茂て出るま 柳

神祇行司の傍に多岐の田舎

△神字 面去 古八白二

糸の意を神とて尺許一 津所

踊上戸の久き神 雲王

以巾きてとれも噴きの神ん 辰奈

未飯いところの神送 聖風

俗名をあらわす神も不柄 物水

乃祖の神の足も湯を 一船

子を連て山れ糸の神 芝山

極白あくる神の苗氣 香川

浮名をいぬの神もよりや 小枝

おまよめてゝ夜養の神 八宗

△宮 面去

宮川にする治の月の日 キ角

神さい子む徳一乃宮 栄幸

我に孝あれ弁天の宮 只丸

むらゝやく昔の古宮 伊良

△糸 折去 古八白二

糸の出来れい糸れのささ 柳松

い糸のい糸も糸初糸 甚二

お糸師の糸糸の糸のささ 糸

角りの糸 糸牛及糸 宇中

戯り縋糸の糸 糸糸 高家

お糸とて 糸乃大名 糸お

去るてお糸おき糸糸 白根

お糸お糸お糸お糸 柳口

△神 尺を付 多行有 舟般

出糸より糸の材木 糸

世糸と糸と糸あるちの糸 糸角

糸力大糸糸糸糸糸 糸角

い糸出糸 糸糸糸糸 糸

死すも人の何と糸糸 糸

己見、松、音、夕、夕、梅

ヤ、を、タ、夜、雜、十、正

夏代

男の借しては玉を中へり
千と百とあるぬ涙もどろけ 嵐雲

△兼神お神祇不地

志し衣束富家冷 兼七多系不既曆天文

占初午玄括時言一俣

山考

志しも松守除松の枝ね 涼ト
あらしも雪つく時あらし 巴弓
引くさきく弓矢八道人 吾水

歌

年の祭るる月や空の月 秋奈
き地を帰ぬ千丈の草 欠依
るるとの柳のさき 神の林 夜三

△神尺裁不地 七及多係者

神尺お成を端々古風の歴史之蕉門
あまきさるまき煙さち守秘法中
又今も帰るるもさきさきとさき
神尺白松守神尺松乃もさき
睡さるる言言日乃ささささささささ

因之聖皇の乃る事布又乃る亦多改之
皇代々白神仏之件ありや言曰昔神
以今の式を改しお根あり其根を改め
一理百通す一是お裁に未ありは二解之
所も松も活り之件をさきさきさき
くりささささささささささささ
とささの人々をささささささ

一尺版

折の敷きまはせよりさき
止裁借し乃さささ 似去

名

只さささささささささささ

去扶

備そさ信立垂ふまのくれ 暗山
胸りちる西あるのれ ソラ

形代はまきあささ内 翁

ささささ お文松さき 吹候

天何

おさあは味ひのさささ 夜若
山を凡るる神の在守 支水
横さの裾さく風さささ 仙郎

わがいゝあぢいばを母に 屋二

まゆをたてておとよし人 辰車

さるいあやうとあなれさ子 陸松

さん用のニウキツいひすく 支考

天

大悪の桐す枝てちりしむ 嵐雲

ツ

むりづゝあゝそ麻すき子 素林

尼ちの秋食の二時のおよき 東柳

孫日の天神もいりも園 琴風

長

高すくも あれい 磨り雲

神仏

持仏もお森いぢのおり 雲鳥

△神衣帯裁不嫌

神 考居乃る 松乃入口 工山

蓬

尺 笠考乃る 衣の被つりあゝ 相茶

ハ 杖の鳥乃人いひこく 翁

そら白のちりい 糸ふちり 文章

松

町傳の挨拶あて大玉燈寸 雁傳

死とあくるちの定まる 三羽

葉川

死す處の所云文よ子 捲 匠吉

鳥の日くき 鈴の鳴りの 牧童

由士少舟渡の舟并 渡りて 林張

神 大木へ又えりも 窓のしきり 仲志

桝

尺 云アの宿をむねぬ あり 吾

ハ 登と冥とありう 喚する 懐の月 蓬二

□ 吳母素三云 カニとと 夏向

死て乃のあきむおるく 誠人

白き被の又も 雲 昇 翁

死をまゝるちの五洞 一

養うわりの杖い 来より 胤浮

世とお白のむす 影く 蒼耳

柳て来る葉も 枝少くて 涼ト

さけけも 草のさく 玉 松枝

神極とあう 表だの犬の尻 文翹

おまじの宮よ 志れぬ 袖のる 柿柳

父を 冥も ささやう 家 言黄

難

暑

了

拾

杖

桝

み

母をよめられて月のおきい
支考

一

あつく消る幽霊のきぬ
方丸

一

子と教す慈のあの子奴
方丸

一

田の平に渡す石の塚
丸

一

懐の奥にうづね世あつと
丸

一

△同伴を去る

一

杖の為乃 人さひとく
子

一

手桶多くきえたる
、

一

何あむえやお甲の下乃
、

一

まのの年乃骨の白さき
コセム

一

まのの年乃骨の白さき
柄り

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

一

まのの年乃骨の白さき
柄先

△世帯二の流
多信者

世帯二の流は控ある淋之牌のちる掘え
大乃吾乃と仕立るおあれいさ信あき理
灯をくく幽霊を世に幽す
キ角

古きうへう髪引く付
子

浮世の身客の又納
子

何をさるもあそろうと
ヤ水

△死 折去
杖と川橋乃死ユク
子

死する人の何うあるべき
去方

死する人の快の名をよむ
乙由

死するも十おらうら果指く
唐屋

□釈教二去 貞三

予をとりて佛社の事言ひ授てておまじけ工
 白毎くの変化を返てあ句の執念を断する
 才風月の狂歌より悟乃る中深し誘ふ翁の
 海客之さまと秋の句作ひも其かきとまら
 乃く知て自在を取つてまゝ授佛宗之りり
 拾 吾人合しやて通る 神 扣 扣 扣
 多の佛乃る名いあやしく 己 扣 扣
 化 されざる意より証の言さく 江山
 乃心の訪て出き世之の養 一 訪
 正尚 笑くや三井の義法しとも コ 訪
 吉号 あし引の流山は白の流き 柳水
 東む 胡凡又てあや山ちの 傳 支考
 吉中 お後爰も食のそあき言灯る 琴丸
 及希 いづくの傳それ死也しく 窟雪
 信 秋葉か春の杖茶の二三尺 立竹
 新百 ちきんひく尺の能持つつく 考
 ねとくあふ山路を中傍を 固友

難 乃の移進は結ばさうと 山り
 吉 乃く工業所善うきん志 言黄
 夕 教者松乃乃くそ佛胸 栄友
 空 且那う戒ちきく飲内戒 衣祥
 三 亦さひてねてあや年も二三匹 乙甫
 きの神をさうそくも主生糸 伯急
 法下の後又誰やも禱きて 塵生
 法後の子の鳴を思ひし 急
 怪兵もあふれいれふれ 生
 名い何とや山の坊松 生
 在山中も花は清み寺 名木
 壬 乃く世帯ある知恩院のう子 一相
 未古 尺云流のうの坊よく知れい参り寺
 △非釈お釈教不暹
 庵坊毘摩笈薩木杖乃陀帝薩十粒
 乃衣り佛坊言子ち子座乃西行老布袋衣の
 風俗人木像先祖伯急後法香極茶迷悟園

鬼地秋 古号の村名 信正谷 古町 珠板尾甲
珠板を磔 金板各十枚 信正谷 井掛け 人の衆
坐後 赤武の金多きを衆と守り 信正谷を衆守り 衆
日多きを尺とす 正月 神祇 ありむとく

ウ 彼者 ちくく 天玉 青い山 柘之
ちくむ 風 吹く 柘之 柘之
シ 旋菜 陸より 移る 柘之 柘之
ちく 信正 谷 ありむとく

二 あり あり 柘之 柘之 柘之
お月の 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

負 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
病中を 衆母の 柘之 柘之

白兒 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

柘 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

文月 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

賣 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

浪 柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之
柘之 柘之 柘之 柘之 柘之

壬

赤袋

先ッ

夕色

一尺

傍若

地ヲ

一抱

天ヲ

イセ

三ッ

未束

山伏は度ひ成て来てれ那る 苔ソ

一りりもあきとる 換 玄席

をわの布袋の形目きく 雪芝

先祖のなびく改て入てえる りフ

先くともやぬきのやまを尋ねる 大主

文節の中い古仏くりり 白風

初めあちやう如来ちの杖 似去

狼や舌の衣よちるおぼふ 三羽

尸乃守く 傍止る谷 去

地杖彼や芝若杖や 翁

小柄ぬき刃の枝の撓むを 修業

滅令の光捨る後舞を 伝徳

三ッの天目と遊し海影を 除舎

お細くくちくち出て来り 桑二

くもりの珠ねを旅の疾起て 赤上

一通ひくんのむの喉ちりて 嵐雪

口氷くわるさかやち黍 キ角

噂より孫子とせむ新法一 考

盃

夕

十次

巾

け外ニ表不端お邪もあや

△ち坊 面去 古八坊去

三匹

葉

寒

甚

盃のんも萩よ 新ら 衣冠

茶費の伝むく昔も杖も茶 聖殿

和老の目よん 後より 杖

昔々十夜は月杖打て雪 涼ト

あちくく紙て舟を又回る 昨才

衣帯の鳥乃巾と祈坊を 琴之

月杖のさる ちくのうら子 王白

ちの小傍のくくくく キラム

山ちのまんち月杖茶を 鳥水

御社伝さきちうあを 牧童

ちよあらんのちくきねんま 巴台

芳辰も昔まうるひ尼ち 柳士

春よ赤子を也する小坊を 史郎

そまよあたるあうの坊方 翁

小 去 梅 准 名 新 尺 端

△古青洲をりお去

石甲あれはを縁ちのう子 菊
吾位よありーちのいさうい

一板を宿い言ふちあれや ヤ水
ほや三井のまちの夜ぬり 且葉

山をく五くくくぬふ令ち 甚二
わんとの秋ーちの区後 七色

△仏井おえい云去

表のほせの ちの歌者 牛角
角力仲るるー初る自己仏 才左

次やうー歌者るるも我力 因入
何井むい白きを後ふすの 我笑

宏根をくそき地務を高換 角
子声 唱る方 歌者の山名

△仏字面去

吉多何村去

毎日の清もすえて仏在世 男小
先大仏よ ねつてうー 涼ト

者 仏 聖 聖 天 元 聖 天 元 聖

何い実村を仏乃もにるそま 和菜
念佛の柳へ咲きぬー薄 奈若

石仏のりき欠ぬかうりう 口通
仏のりき花を ちある 一物

△傍尼講面去

為へりあて傍重の月 正秀
系村子森は移るり掃傍 文仲

よーの山仏信傍のトー 明 揚水
真の 禁乃 傍正 谷 一船

そや傍のセくさくむ声 宗波
子あー傍のまろーきそや 盛水

尼ちのむさ丹をちるすれ 更芳
袴は子尼入乃も田川村 楚由

陽清ちーほるま傍の秋 木守
そらぬ内々い家溝押あふ 千那

△釈衣帯裁不極

古今の變化陰陽の清是い人思の恒あるは仏乃

一の雲常とつゝい仏とい常位不変なる故に
 其中一と佛此は世常といつて死去衰亡の
 変をとりそい人鬼乃指おれ世出世異なる
 衆と衆を離れき理處もあはれと衆氏子
 毎常をたぐおし門におくとい支佛の草木
 云云衆の世をともて降さ守化益すれい仏の
 乃よくとい衆の成におを離れく云云の中
 衆をわさむむそ佛世の花を日月二日を
 送るなりもあすき云怪語人々終すなりよ
 もあすかる法界の理を要す捷徑の字
 なるを佛門に入却てお理は明くある人ある作
 衆のそむ宣おれおれは衆をい衆をい衆を
 卒覺解の世常具あれい衆之是是は衆
 まちるおとて離れく水も花も木も沙も
 去急も灯もは衆を成せおめむやそとむを
 め衆も世は許多あり衆をまぬそともも

亦ありたの傍を足も衆念をれあむ

格 另

格 陸

格 陸

格 陸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

尸

カイ印三

三三

めつたれていまを衆す松 ソ英

陸る目の井傍の天をとめ 陸風

陸ある衆は法花む声 衆

九粒の後て青心の塔 ソウ

くんの松初くちとあり風 松水

むらもをりを衆す夕月 風分

陸一尸のまごよりくろ 陸蓬

行そ守五天乃昔ははちや 奇角

衆ある衆は陸つそまら 奇角

小石よりあり怪草のあり 小去

布子ききそ布子より小の果 風

陸まあしそ寸莫衆の衆如 去

五その傍れをうろくれ 柱楯

衆令の衆は衆のおよをれて 竹隈

風より衆をおくくろの対死 相衆

風より衆をおくくろの対死 相衆

風より衆をおくくろの対死 相衆

風より衆をおくくろの対死 相衆

□乾坤の位

蒼天の去帰と天象は日月星辰より成るは
 為高言を事務最の教を以て示るるに属し
 一休矣の徳年わくを信也考教を以て示る
 以て事務の西都に属する谷岸の山水は属する
 稲妻雷光の光は天宮智慧深天宮照晴
 閣探赤の乾坤の位部は入るや分て各
 状を存する付の旨を以て示るるに属する
 教を以て日月星辰は陰陽未を通すは宇宙の
 おおれざるあつと天宮を輝かぬは天宮の
 降り日又天宮の上界之三光正中を以て又云
 下界之人におはすは上界を以て示るるに
 日月を以て示るるや又向照晴閣探の教を以て
 休用を以て示るるは人位の教を以て示るる
 未を以て示るるは向照晴閣探の教を以て示るる
 是の何ぞ教を以て示るるは向照晴閣探の

乾風と名する時必動く初は夫のくおす
 木かひき名沖浪逆るるを以て示るるに
 さるは向照晴閣探の教を以て示るるに
 法益を以て示るるは向照晴閣探の教を以て
 して日三光人位三光は向照晴閣探の教を以て
 教の云は教す稲妻の光を以て示るるに
 教を以て示るるは向照晴閣探の教を以て
 風光天宮未の各名を以て示るるに
 居はの互うしては向照晴閣探の教を以て
 教も示るるは向照晴閣探の教を以て
 示るるに属するは向照晴閣探の教を以て
 の位は向照晴閣探の教を以て示るるに

△三光之三光 カミミ

□乾坤の位

既望
 倉作り一日し時ありり 葉香

他

るに肥るる冬のみわび 寄香
あしきまゝ舟のしるも 友に

音

川のみんはるる田を極て 高石
海天子時を月を秋の色 柳に

対

世中の杜よるる夕立 僧白
秋乃るると定ぬぬ空 自笑

一

血の乃れ恨毎日の去乃る 似去
時々の松乃けきをよし 二相

△雨回川五去

壬

秋風のる木ろくと川の上 土芳
哀よぬくくもの白鴉子 栗芝

△時あお去

松

又之れの家よ自のる村時白 徳子
初時自去の松を信束て 三海

白

又之りや時白て中よ一昔 小枝
高自く時白て時て夕葉時 長若

雜

村時自十秋の内を葉りり 僕石

後

京都北の原隈の春時白

亦乃

字方自傍の山麓構時白

木因

西公と考ては口秋しれ

支考

冬

△降おそく去 吉及者

○

表

表表後後後後冬の香をてめて

あ依

印

かも枯し表の秋州

享子

表

乃者行なま考の今さして

、

浪

めり星を忘て表官しき

空玉

表

去の考好ふはへ時より

仙芝

表

居ふろの中て又てあをを

波登

表

入連とくふる乃て考

可夕

表

灯火をきき稻稼乃る

キ角

表

ちりくと雲陰む珍き

高若

表

あつらえてるあをを

長徳

表

月時を想い表相の傳乃

牧者

コト

雪を足あて影をらす月
白鳥や足跡ゆくも未ださ
るは跡先の山を失くす

ヤウ

鳥居の方の中よ一むれ丁の声
おふのせとよるのなるはく
△降おはは年首定秋不煙

カ

雪のきよなひくきふる
雪出して脈は余る春の約
△降おはは年首定秋不煙

カ

雪は出て土気寒を返りし
只中よ月そ返りし

小

神のひらりとさきさき
生約をききつるはのる
△降おはは年首定秋不煙

イ

うき旅の跡と連くはるはる
おぬきさうぬきさうぬき

飛

△降おはは年首定秋不煙

冬

初雪のそらも積雪の海
水

書

雪より又尺の船の版

新

雪の少のりもゆるり

百

雪の若かりし雪の若かりし

真

足元をより又西る雪

る

るわぬわぬの下を踏みぬ

草

雪の秋の雪の雪の雪

雪

村の雪の雪の雪の雪

札

雪の雪の雪の雪の雪

雪

雪の雪の雪の雪の雪

又降おはは年首定秋不煙

又降おはは年首定秋不煙

又降おはは年首定秋不煙

△雪の雪

次

雪の雪の雪の雪の雪

次

雪の雪の雪の雪の雪

次

雪の雪の雪の雪の雪

△雪 面去 九山百よき

持上雲のときり雪路草 栗秋
 梅弓矢の相乃雪をぬく ソラム
 仁といわれてはる白雪 霜
 ちりとてはる松柏の雪の雪 千川
 雪の雪積よそく 茂る子 霜
 雪の雪曹田宗の夕氣 川
 細く雪は 階柱の雪 杉尾
 雪の雪もくやく 霜木門 雪水
 雪の雪く届沃丁の雪は雪 長水
 いとく 多雪く雪の雪 甚之
 山を後 樵乃下雪 杉風
 灰吹揚るあまの夕雪 霜
 雪の雪さし 杜の下雪 風
 木積よりく 雪竹地の雪 霜
 小待りの雪もあはくと 雪足
 雪の雪打やお雪の雪

一きア
百勻

△雪 面去 季カカリテ

雪玉 古式は雪百勻にそり合ふも印
 ▲支考の古佛佛百勻は五あり又白雲其佛佛記
 雪の力仙は三出する何もあり印面去ととも
 雪の五去位のおいた力仙は三許り
 柳 社 月雪の柳や花 支考
 名のある枝の雪は日の雪 子雪
 拾 八かの方若枝枝は砂る雪 老
 炬おききく雪は雪すせん
 雪の雪竹はちとつとつら茨 蒼水
 去の雪も雪の雪根ととも 考
 日一節 画の具ととも雪の山 甫雪
 雪の雪は 鹿気 雪は雪 百り
 又乙雪くちきる 雪の雪 左志
 雪の雪の雪く雪の雪 雪之
 雪の雪の雪の雪の雪 白雪

去

あふれい林の在ふ白うめ 許舟
 岸あめ給ふ似て暮山家垣 吾仙
 初雪の伴竹の山よりちりり 元明
 雪ふちれりちりりすの雪 老
 町中へ流るる川の雪あり 明

△市 西去

市とあふれりしころる便船 古乃
 引給ふ市を思ひ持給り 兼王

△雪 市 散不煙

雪の白のそそ雪の山々 紙人
 又けりり北乃の月まき 力多
 君の執りわふり口行 相豆

△風 去 二去 カニ五 多何者

古云々も風件も三去あれも多も多用
 あるは二去許せり又老るる風件のはあ
 肩て風きる後の出代 り由
 二風老樹のむ乃るを 許云

勻

浪

岸

み

夜

野

甚

和

枯

亡波をりりききき木嵐 西村
 林ももや給る雪の風乃き 外丸
 角立てくる及巾山ノ風 葉少
 風のうくも般恙心種 涼卜
 ふりちり髪をくく雪風吹 風文
 胡瓜のあしし未まきり 虹棧
 あももく雪と風吹の押さる 貝出
 浴衣の粘乃るる林風 崎枝

△風 河洲 三去

風止てあふれ修の返舟 正秀
 林風り網の雪をくくの浪 鬼苓
 袖ひり又起きり林の風 岱水
 去風も雪被守中 務雪居 嵐之
 身もまある風より冬を捕くま 口臆
 風ももる夜の星うけのきあき 江余
 風あき雪の柳地よつく ちり
 り柳よりよ更る林風 千川

朱云

舟の出る白くなき方の風 漱
月と風との境に新く人 季

長衣

秋風と白風の 狂為 伯楓
風の拍子と膝も一さし 仲志

水仙

あまの吹きさく尺林風 香色
川風まきこきさく新の芳

柳

さくちを惜まぬ風の吹き方 り香
花おの垂るの風うかえ 志

笠

わらわおきぬ風ひく 幸平
衣をほれと風うさ遠 せ原

己亥

さつらんきけぬ風さく 才沙
秋風と枝の戸はる孫入て 良平

己丑

月ふれて石を根まき風さく
風冷知る年の子乃 操 翁

井風や吹起されて思えぬ
△嵐 嵐 おき

△嵐

おき序と序す

あ

初風初々の窓の坊さき 水
秋の嵐う 昔序より 力弓

疾松

嵐うたむむ世のあき位 孫取
嵐ささる 香の明星 ソラ

去云

嵐の口とまきのうらさ 朴人
嵐のつらふ山の斤ひく 好宇

山

約瓶 嵐の枝更ゆく 葉少
角ちてくうら中ふ山下風

△去風 秋風 おき

今川あり 秋風 秋風 秋風
秋風 秋風 秋風 秋風

一松

いよほおんはるる 秋風 翁
ぬんさるるも着る 秋風 修章

み

去風の他に後と押玉寸 藤附
去風を教える 去風 翁

只西去そく 去風とあり 去風とそく
西去そく可ありむ

△風は吹きて不燭

香閣の廊下て紙燈吹消て ヤハ

キツ 山のあらしの細き旗の音 袋水

おぼろふ袖を揺る杖の風 ハ

こぼすぬ尾の夕風吹入て 竹花

今もよきあきさき表紙あけ 一橋

風をふりく踏何者人もまを 舟竹

七 岸を揺る風の一次 一瓶

陰裏も日影乃明やき 以水

岸をふりよる月のやき 志水

白羽 小使も出てまきくろきめ 水麦

ももまきく十日まきく木このま 車室

岸をまきくと吹消る 風 河橋

△風は降律不燭

風のまも南よきも上川 羽

小舟の水をほく夕ま 柳風

おもく棹り霧はぼれて 木端

雀 麻水のまきく流る青の風 翁

門のたい足さるいそさり 占ホ

けのまきく一村のまきく通 三芝

茶 ちんワヤのまきく流る 白鳥

おろく嘴あしはるの来て 柁リ

あし地まの吹てまきく 荻戸

低 人遠くまきく玉 あくれ 灰柱

みくむのまきくのもんあきさき 信化

全展をまきくまきく杖の風 呂風

疎者 榎をひる風のまきく乃月定て キ角

早きまきくあし膝の 茂士 暮翁

あしとまきくあしむ杉をきく

板中孤の傷をまきくは茂士の白を扱て次の下と

長白をまきくまきく古字中よりてまきく補ふ

浪 思陰のまきくまきく双痛お 林陰

今まきく人も田庄一ぬ 支考

面白くまきく風のまきくめきて 柁之

春風の吹く開きけり時 柳 柳函
ひぐしのむのむきききき

冬 明ききと鹿よりなる鹿鹿山 松守

△後年お二去 貞今日

草 白子の古丈我きりの山 工山
笠持て鹿よりなるやせ男 菊

去 山多心月一けり赤立て 石相

糸 夕のく仲の意意くくる 手

你 新株や水田の上乃林の雪 柳

笠 古丈州柳の及のきりる 小三

笠 雪のまれてくくくして打なり 松守

笠 冬の中井上まきの西く時 始成

お 己のくく仲の秋の夕月 杉風

糸 栗山の五宮ま茶ききむむ 陰枝

糸 為ききいける山のふきとく 小枝

△雪 三去 貞今日
松守

古裕 浮雲の消てあきき松松 風
探函より匡のまき残る月 菊

小支 中まねの山のそ落くききし 書信

耐 しくしく星の芽つく横まき 嵐竹

耐 樗の花より中よりきれく 周以

コ八 ありつくとものでちれて母を 賢長

コ八 先目しくしくいさあひの雪 許六

百 木やりける采り挑る花の雪 松

百 去つありとやるるのききち 夕布

百 けのしくしくと昇るまきき 蒼生

百 月又あきき中より家より 市

△雪 三去 打去

草 傍の吸くく種子むむ 為楮

草 新玉あき捕まきき 小松

皮 桃の日ねり山や鹿むむ 口松

皮 木路より清めき山 中 涼ト

与

門前の梅白く咲く月を見て 桐原

尚

山も花散りてとてつらき 桐原

一橋

正

さや 後子 花散る衣の袖をえて 桐原
古橋 千代 花散る衣の袖をえて 桐原
新橋 徐福 花散る衣の袖をえて 桐原
山も 花散る衣の袖をえて 桐原

又

きりり 蝶の 声き 帰る 示右
きりり 蝶の 声き 帰る 示右

煙

△

煙の 火 煙の 水 煙の 煙 煙の 煙
煙の 火 煙の 水 煙の 煙 煙の 煙

芳実

里坊の 桐 横川 上 立 てる 枝
つき 志 とも なる 枝の 雌 桐 貝 妻

一橋

小風 吹く 雨 降る 雲 出 雲 出
雲 出 雲 出 雲 出 雲 出 雲 出

浪

林下の 雨 山 の 霧 子
け 去 の 心 浮 世 世 惜 れて 泣 泣

信

△ 徒 卒 打 行 白 雲 音
雨 の 利 多 雨 の 雨 多 雨 多

文

又 とも くと 神 傳 々 あり 嵐 井
わ さん の せ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

小文

風 中 の 雲 々 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

古

古 云 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

△室工天人 陸工照哉不煙

♪ 夢臥て寝やむる雪のそよ 痛乃

リ拂 十ほ栞本うつくね杉 以重

そ 楽のそよそそ花工天少女 身影

レ けり子呼て書たれけり 随写

又 青山風の巻きし海 朮合

テ 裸もあられぬ旅の照付 和琳

△室・新 五去 古八如去

たつ寸とんあつて大工の上の虫 栂石

去い新いあつる白く虫 一

陰もせぬあつてそそ星のき 如尺

一本 栞もりぬそ 五香

杖の色とて空つぬ 去 自笑

去い新いあつる虫のき 一

室のそよそそ星の地とて 一 渭川

老おのぬれさる声の虫の去 一 其の

杖もそや栞のあつる虫 一 支考

栂 少 尉 貞仙 栂

さつ新いあつる空のき 一 子虫

去い新いあつるあつる遠 一 位王

一席 一ツの命 去い 一 粒

日のけのあつて栞の栞 一 暗皮

影の新いあつる栞 一 後者

日けのあつるあつる 一 一原

月けも吹ちる川の夕風 一 如室

△照晴 五去 古八如去

△照晴 五去 古八如去

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

去い新いあつるあつるあつる 一

△園・星・光天雲

ヤ	栝	栝	七	キ	新	栝
新夕等扱るは以木の同字各カカレ云云 仰ありを合して十余も出さず	栝 栝 栝	七 七 七	キ キ キ	新 新 新	栝 栝 栝	△天部 おま 新夕等扱るは以木の同字各カカレ云云 仰ありを合して十余も出さず

□附分同字云云

多分者

浪	看	みの	善	三日	フ	商
浪 夕日と栝寸木塚の松 けしに栝ちる夕立のあれ	看 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ	みの 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ	善 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ	三日 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ	フ 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ	商 夕立の栝ねまのまきあ けしに栝ちる夕立のあれ

萩花

紙衣もむらあきく月夜て 白之

三日

丸紙て人よんもくるくすれ 葉不

葉川

夕月の色 まくの夕ぐれ 板口

白扇

名月。柿下の橋の芳うけて 世話

袖あり

芳去をつくと母井の門さして 支考

我白

新入いともあつたたく目の芳 板重

書き

庭の行い善徳の橋の芳より 十枝

柿十

おとりの芳も涙り明くはて 季

夕芳と冊子よをいひ忘る月 子鏡

月おとも園も新くあき 考

おゆくととくく高の障よ 及朱

あうく月よをそそて牛あふ 口中

こそわをもわねす小紙衣 涼ト

まのよの明れいぢの灯を照て 梅光

月よとも園も忘れぬ雨さき 仲志

下もよもひるあきくきり後 昌杯

せう川

江の声はす八おくあささか 和川

良

ちろを山あいの裡及寸香の中 席巻

射

香の質はけい射のかきもち 且泉

せうし出て今香いねにちきちち 何甚

くくの月あきまへててを 聖角

月あき雪の板木のてこふて 竹深

和あいの花あいの林の板すくや 菊

三股の舟 江川の 板、

中におぼろの あをぼいし 徳

風くく大さの板のセツさく 徳

△異時分秋三趣

徳き時分と秋分三法古武のさき次次の偽きを

時武日の日むくきいてんせく 如風

劇

秋葉木の 出の川口 冬衣

葉探下と蹟をふくすすし 三拍

はるの口時分あれも時分と葉をのぶらうと紙を

其節

山さへるる孤のまきくへて 作

花といまやとほきくし 宿

五夕

夕月は日よきあるまのき 處店

残る枝う給きくまの 宿

壬

梅香あつくとるる 宿

ヨ夕

夕月の光る枝は実と成て 土芳

後

いそ川よる辰の柳つげり 由

五時

素更の影を始とて 反村

よきよんおののまきくの月 木守

天月も青の影も 涼ト

七き

よきの宿とて合す 欠若

身時

播人を又まきく月の明後 一々

おろく口もあすも 柳

化

あつちの吹てとるこ 落丁

吉時

せんくの明とて 支店

まの枝の隣に 宿大 宿

夜とまきく 支店

夕

ヨ時

種命を後とて 山

種命を後とて 八朝の影 陰

五時

林の水ぎらと給とて 杉

五時

湖上行被残る 仲

初もつぬ風の自由さ 宿

宿人のたきくあつち 宿

五時

長をえいあれとて 宿

若人のほととて 宿

五時

△お分二去 宿

お分六言て 宿

火徳の火徳と給とて 宿

五時

宿よかむのまきく 宿

月の宿と給とお宿 宿

五時

今もつと今 宿

宵の五鼓のあつち 宿

五時

若切て 宿

宿

五時

宿

△秋作裁不強

本園蟲砧の秋の初めから面白う守されも秋
分は持合ふ一々外は秋のそよ風

△秋の月稲妻夕陽の光を我が園に秋
夜に賦記す灯の秋の初めは秋のそよ風

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

秋

秋のそよ風もわらわぬも月
とととと秋のそよ風
蒼苔の下より明出して

□時記

夏記 今昔を秋武三子に十子の子と二百
 婦しおの秋の七十八十まきらまきまを
 と細信の秋よ分りて 本文長とハ上下有
 △は信の秋武三の秋名を後之を後之を字りて
 千の秋ありそドンドロ七十の字と云々と今
 よつと云支考難でまとは偶ありそドのド
 トとの畧のじと云り 是は支考難で後之
 秋武のソキとある方正一ニトしの約を千とい
 そがと云とい二百まきらまき

△今昔何より三去

秋より後之を秋の字号 翁

け石のよとまき世まなて

△今昔 三去 支考

むのま由由系秋の秋の字 秋

秋一秋ありそまきらまき 酒

年 子

身目

名

翁

去秋

小文

梅山

ひき

質武三のまきらまき 翁 白

掃くまてまきらまき 可推

何より今昔のむ十日 支考

めつまらまき白子のまき 正秀

只今昔の子に子こりり 占本

月とむ正の秋と云るまき

△凍回季 支考

七月の笠乾れや清し 支考

おののくしは清し 支考

△寒く季より三去

フそまらまき一葉の下を吹ちて 史邦

アれまきまき隣の秋茶呑合 翁

ト戸のまきつけの秋まき袖 支考

フおののくしは清し 白空

ハまきのまきまきまき 二烟

アまきまきまきまき 及肩

フおののくしは清し 支考

△空回李 面去

白木槿のそんや〜 林角

ア 居るわいののねえ 林角

うきんをさす 拙者 正秀

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

拙者もさす 拙者 正秀

さういふ事 拙者 正秀

懐く ああ 拙者 正秀

セ中のさう 拙者 正秀

ア 居るわいののねえ 林角

公館 林角のソ〜 拙者 正秀

金魚のさし〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

名目〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

ひん〜 拙者 正秀

細〜 拙者 正秀

花〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

おさき〜 拙者 正秀

△吳名の月並 賦不煙 吉三云

卷二 月並の月一夜文意 併せのれ二句を

▲コ古武をうわむるるよイ名の月並 口を 燿
あー月並とせうてん 幸らきまむ

キ角 新 梅の雪の陸この 閑 似去

コ雪 首 妙月の蓬萊人もすあすや

△春夏秋冬字カリ 賦不煙

汗六 傍 飯をふ冬向の 下

為 併 新 勝子の 湯を 傳来て

ヤハ 去も 又すー七まも ころ

ハ 門コ 表出 守月の たを くれ

ハ 中 月も 林の 日をも さん 言う

ハ 髪 節すうりも 初き 杖 風

ハ 初 節の 雪 層の中 こそ ちりて

ハ 雪の ちり ちりの ころを 失く

角 小田の 林 くれ 飯を 守人

角 併 併むり ぬきまき とも 思

角 林 九十九 くれ や 久く の 去

角 併 け 及の 肩を せて 首を する

角 併 尺 節の くれ の 花の 一寸

角 併 四 尺 寸ん くれ 乃 林 くれ を

角 併 去の 旗 串 披く こと 後子

角 併 掲き とも を 結ぶ こと 終る

角 併 及あ くれ 月よ の 節を 林の 風

△春夏秋冬字各五云

去 及 林 くれ の 同字 各カ 仏に 之 一 併あ

併あ くれ 月 くれ ち 二 去 一 出 有 くれ 及

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

併あ くれ 月 くれ 二 併 併 併 併 併 併 併 併

夏衣

去の拍子の 山影く 暮竹
降びしきも去を竹あし 支考

本朝

十雅形の北にまゝに反折して 花肥
夏大振の櫓の 庭落 隊幸

家

〓 庭石の境切くる 杖のあ 岱水
手あまの一人もまゝの圃の杖 ヤハ

松塗

下地まより 杖を取て
ワのろろの障子も母の杖文て 牧童

枯

水くねふとて 夏あまのあし 嵐考
澄くもふ吹もるあまの月 東照

ソ

あしくもるりね 杖のま 更令
存吹くろ 杖のお風 伝化

百

去集に去字三きる老八あり 其余何多し
さしらの声も言中の杖の坊 老

秋

余程物くる 後家の杖風 ま後
杖あれや紙の白根を公のむ 化

△

去去秋を字き南のむ
去杖の字を用ひて手柄おくを世ま言ふ困て
去何杖何し用ひる白ありやも夏も七入
くねむの拙き伝へききるあしの一も竹さす
徒尤 其色を先居れ、作をま 三光
乃杖のまの八平に去仕へくは杖をよき寸
又短いおろろおろろぬんを茶の承めてきき
心細くあまのほくま、用て其まを合せり
りいれい旅トきふりも去トきよき旅乃
余情を合て却て傷ありはまをま用ひる
秋に出てもまろろろて面白

白

夏心帯甘の 夏の月 反村
是白居衣の余情をまきまき又涼しき
あしあし心はあまの石を交字よろろ

カイ印三
五二

母てまわらるゝあつた

△五冬回季二五 一よととと 古八五五

春三 芳きうの季へ初てあまきあつたりわれと
あれらの持合ふよまきの言とある時多しけれ
今の他世の昔林の傍の昔さきもも友あつた
さきもも又日暮林の傍の昔さきももあまきあつた
さきももあつたさきももあつた

△序六のあつたの傍よりさきもも瀬川句さき
もも相二きの傍あり「花枝樹山伏いさきの昔さ
きももさきもも二きの傍ありさきももあつた
一と二と三とさきももして又二と三と序六の傍
十文字の昔さきももあつた

作
十文字の傍り 樹色の 為さき 宿
の昔さきもも声さきもも 酒さ
さきももあつた さきももあつた
白
移つむ昔の昔さきももあつた 序六

東む
さきももあつた さきももあつた 支考

ひき
さきももあつた さきももあつた 乙考

射
さきももあつた さきももあつた 柳考

橋
さきももあつた さきももあつた 自笑

コハ
さきももあつた さきももあつた 杉更

全抄
さきももあつた さきももあつた 一吹

△他季カ仙コ五五の傍

他季さ中し用らるる昔の昔さきももあつた
あつた一方あつたも一方あつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

出ずおと被^レ是一人あり同季の白きいねのねま

ノ鼻の先あられと大油持て来る 以て

と秋戻てあすい ちうく 支替

れゆ 面白くくしてあつちうり

おのりゆをくつる 山う

おのりくう菜畑の ちね 赤

おのりゆい 吸筒控さき 仲子

日書へ 海へ 吸筒控さき

孫養やちきき月の舟伯

あつちうり ちうく ちうく ちうく

△長杖の季を引上るる

ちうりのかりむのちうり ちうり

ちうりのちうり声え ちうり 二幅

ちうりのちうり ちうり ちうり

△初をたて ちうり ちうり ちうり

ちうりちうりは余のちうりちうり ちうり

初書の言をけりてして長杖の季を引上る
月花を引上るは他季もあつちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり

△東夷カ仙二百句ニ

白搦之のたまはるる中に出るは或は杖
ちうりちうり他季のちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうり

五人ちうりちうりちうり ちうり

ちうりちうりちうりちうり ちうり

読き

橋川の月をカよ山あきて

そつとさうけの 紺の勢 ヤハ

わくわく成るも 以ぬ水の意

支 ちうあんちうまきを捨し輝た キ角

仲のふの白く 樹をさしく 百り

其節

玉遠は花をさむむ 古那 嵐雲

候の力も じす 於花 角

花傍の毛尻連るる 春の月

白の毛をさすう 勢のあき 角

柳のさきさき 去るの 柳の 実 文り

新

雪村の柳をさすく 柳の 実 キ角

二ホ

梅のさくらの 影の 閑 似云

十七回

二月の暮葉 落るる 春の 柳 コ角

三三

柳のさくらの 影の 柳 千り

△季移

三季移の両季移はうらうらと字と只月とい

花とく白の 柳も移り 深なる 柳も移る

を 林を去るあり 庭袋に 三季用り 自ら 自在に

戸 彼春 六代 木の 春林 移るわい 句 敷きりしり

き きれう 徳 二キ 移り 力 他 我 不 あり 三季

移り 力 他 二 不 句 二 不 之 三 橋 なる 角 角

も なる 句 句 白 橋 二 三 三 三 三 三 三 三 三 三

乃 白 橋 已 上 移 之 或 乃 友 林 去 林 去 友 友 友

林 去 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

冬 一 方 あり 何 難 又 友 去 友 友 友 友 友 友

月 光 花 之 中 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

又 去 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

時 前 傍 の 橋 上 移 れ 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

用 之 中 の 他 二 三 句 三 句 三 句 三 句 三 句 三 句

月 も ち り あり 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

移 する の あり 月 花 の 風 鈴 の 眼 あり あり

土 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あつ。○月出の団をさうじつに持て
表 ア 赤りの葉のけつ。杜風 翁

、下して極まきくろき相 玉
、あつねのまきくろき相 玉

、冬を語る精阿の春冬を来 翁
冬日保川もあつより三ヶ所あり

拈 + 坊門アしやアの友お カサ
ア坊の段乃もしく出ア分下 横ル

去友杖を字に目立て極まきくろき相 玉
まきくろき相をたふ友おとよあけなり

奇 フまももやまきくろき相 玉
ハ 匠者の紅乃りも三ヶ所 白相

令 △友を極
フまももやまきくろき相 玉
、あつをさうじつに持て 匠人

ナまのまきくろき相の持て 匠人

ア フまは法をのどうそきやら 楓王
ナまのまきくろき相の持て 牛郎

足 フまのまきくろき相の持て 巴丈
ナまのまきくろき相の持て 乃川

囊 フまのまきくろき相の持て 支那
フ布子より白回の実成て 芳川

リらまのまきくろき相の持て 芳川

ス ナまのまきくろき相の持て 芳川
フまのまきくろき相の持て 何れ

かきつに尺半候あり耐まのまきくろき相の持て 芳川
とらむよりもまの緒次とすも方ま相之けまを

ゆるけりるよ木をさきおきり大を出守とも可く
△他キ一白候
白足 秋をて蘇のテおまき却 牛角

。年の候をたくく夕月
休まも二不控段の敷の色

八夕

フ 遊きをおく候搦の白
 △ 仏さん不化は但すむ乃比
 二 中板うすむ 入お
 △ ちよきくひんのもちりさ
 予あらん桂に五中 昌栢
 蚕畑すりおよる去る揚る 和竹
 瓜実煮の煮るおおく 子虫
 ナ 初帯乃後乃のまを強くと 何豆
 毛布屋の物を使寸出代 ウ中
 人の口戸の明てあ杖の風 寸昭
 ○ 度んまぬ月一尺破 乃考
 着袴もみむ西行と照ゆ 甚二
 白眉 ○ 灯の光も影さ月の思 汝徒
 吸おささる松の竹のうさ 林紅
 丁あまつつかの杖を思ふ 夕非
 小便り出てきさくらさめ 赤麦
 △ 花もすこす百ささの木のま 赤麦

白眉

毛履をさりと吹ける風 洞瑞
 ひろくあく保氏に陸は舟早 窟妻
 △ 巳キ移変格

甚

フ 舌の目内を舌の博をそで 甚文
 ハ 琴うおある梅乃移さ 蕉豆
 、 柳実生とれとるお忍 イ指
 、 衣忌久くさいつき来る 散人
 ナ 竹を初考するよ化替りて 翁
 ○ 乃極の月よ車 忍をも 炊玉
 ア け聖い極する考のさしくと 巳百
 、 孝子みくむを折おそり 用呂

高栗二十一ア五二八三巳キ土続アリ

拾 十句
 ナ 葉くさむの雷よお竹 清風
 、 友やちよ負人の容妻衣て ソラ
 ア 玉あつる目いお云ぬく 美英
 ○ 入る月や申るの方奥もあ 風
 ア 丁を放て破る竹の戸 扇

丁あぢのそとさくむちつて 英
 去の袖は年暮れをさす 英
 慥ねて去るまを傍ねむ 英
 火串 去るへは玉の心をさく 英
 庭の花き連房一両白 英

△南季抄する事

園月むの白も陽すに季の付白は夏を事
 する事の二三の程き時に南季を抄て南向より
 抄す一海は抄子翁と北向を定て門の花とあ
 るひ長刀と趣向を定て橋の月とありよそのの
 二三の事を時に北東南季より抄て花を月
 高の敷より白の風情を事す一は二つ乃
 抄方いえより変化のありる事を事す一
 今北南季を事すを今北東南季と今南東南季の
 末れもと床より空のむせとをけおれを
 函てきて入体は北東南季よりしていれ

揃る家通の波をきく一書おれは「抄勝
 改とありし現おれは「抄子と子安をさへ
 る句は中のもよむ花田を塗をさるの敷を
 手柄敷はまきし帷子の近より雲天打の雲井
 なる「南早しきを南極抄干も季を連て
 復と「栗坊主は男も秋はたありとや
 月毛約月家或は月の元天をわくわぬ河
 をよ出「秋葉宮を著る系小葉は紙も婢
 にもあり桔梗の段もはまか「一書終て
 扉の巻子を死む熱一社の仇世をさるる
 季の白文はか「又作急を母む徒ありて
 実ふ山原を抄むる花の上下の字を二玉は
 分用て是を別季を抄て四あり却て其
 山の雅とあり其花の去とありるを急す或は
 極と加嵐とありの云はは飯の連を難へ
 さるるいふある人の邪とさやまれいふへをわ

又さる有あしと字子古人の遊さかしく

△春 他きを常き汲る傍

他 又知る才知子の所出て 沾茎

ひき 偏協の毛あうつらきき出て 口通

炭 新細の毛えり居つくまのよ 口唇

、 枯し柀を今こをうして 盛水

、 残花 冬よりいさう集し池の魚は 沾木

枯 手残すまは 板の掃換 カ号

畜 味はあすい 衣更 乙 支考

小号 郭まのひもをきて居る 如り

百喙 袷衣と襟をくくし 襟門 風竹

梅十 ひるねする裾と大襟の持れ 壺平

△同 季を括る傍

冬々 夏を乃日をかき叩く 扇

夏月のを月の比は西日の身をつあり

、 指おる麻着る圍の仄ある 号

、 包防やう 偏協の云方 フ船

雅 カミ
ロカフ

、 けあひと強き夏郭の声 横ル

七ききき 是を柀とあくものの中 一才

トナ コレマコ 糸裾のち猫とさう作て 扇

白兎 隣りの男猫 はまの 妻 キ角

他 カスミ 乙ちくむくもあいどんや 土新

種 去考 移世も同價の房あれや 千梅

ウツ 考知 ちこのちと一節まわお初て 許云

东山 考知 白狐の毛麻とちうその川 菜色

、 浮く海の中や残るははう反粘しり

山夕 笑山 採る旭の山むこころ 六之

、 夏山 ころあしこの他やうな来ん 天垂

、 夏山 板と居る考田を又きて 糸兄

、 七代 手枕の秋世は始り新巻傍 位里

、 子ハ 新和書 鳴りも春さんちあうひく 琴尾

、 新和書 ぬけの他は四季の中をさきまといふく夢ぬも

、 新和書 あう又福は返る能くあうもあう是来あう

よも今百対候よ又かく作て百持する
付の雑事ありし

△雑の扱を季よ扱する例

申 雑の扱を季よ扱せり 乙由
柳系等所書もこの扱へなるのふあれて
季よ連ても扱ておれも持守持物生類
持物はたもあし仍令風の柳をト作ても雑
こさるを扱を扱せりト作らる一層の扱之
さうあつては扱を扱て同書の所書と扱と
とりあつて再するやあつれニハる止の曲之
雑 一毛扱及うと撥く扱又連 山り
扱及い仙家の事あれ扱勿迄之矢季文の万
の法集の中は外より是等守只扱よある扱
は曲書は用ひし法家の季書よ扱及い出
るる古式扱字の扱

△又 他キを扱キよ扱する例

ヒナ まいこし度その素筆三度扱 拙子
あ 乙名の三もんよ是等連なり 拙子
及 雑ありあつるの扱の扱もえ 許云

△同 季を扱する例

ち扱 風カ あつるや扱をさる風書 箱
百鳥 え扱 ハツラセリ、まろくまのめ 乙甫
サレ アノ田 扱のまのしのカあき 風 扱
名匠 イナリ糸 神も扱びの扱の目うら 枝爰
多治 アノ下リ 月勢の扱りの大丹打所 乙扱
辰 アノ下 本等をさるくあつて山す 乙扱
あ アノ下 まろくあつる扱を季 扱
、 アノ下 まろくあつる扱の扱 扱
扱 アノ下 辰候の扱の扱を扱合 扱
三匹 水多シ 水も扱の扱の扱の扱 扱
箱 アノ下 扱も扱の扱の扱の扱 扱
八号 西行水 扱も扱の扱の扱の扱 扱

△秋 他を南きよなる所

杜白 燈のよ丸の箱つ付口ありて 菊
 子 ひとりのおのちえ掛し声
 猿 大木の育ぬまふくれて
 鳥 炭竈了ねて多の 枝 杉風
 キツ なるそくくく 捲りるく
 拾 冷初らぬらう 人よなかり 雪丸
 せらら 巾やつるせりやめては比 故に
 葉州 雪のち子の日も折ある 匠若
 白扇 口印をまつ 奈の扇の巻く 之士
 艾漉 菓の二えんは種をふるく 支考
 山中 せらるもあぬも皆橋木く 里白
 △同 季を居る所
 翠谷 許されて甘中の中の方及元 菊
 猿 其の世はるく ち子の作
 花 年よ一斗の地を斗るく 去来
 白 先つてくく ちのお成 嵐を

冬ソラ 菓を又てくく 家ふ人 許六
 白見 綱ある衣いひく 櫃の巻 彫素
 猿花 すり木を粘強るも 只あ奇 二岸
 山毛 何白玉の巻巻く 可及
 あり三月 新の巻成り 信世く いかし 水
 十七、 世を又て巻く ちの引余 孤松
 、 丸は也 もまやつく 何がとあても
 、 ち ちんくまの上毛の巻も 妻母し 柿屋
 了り 五三と引てきりま 竹司
 歌 平けよ巻く ちの巻 大町
 及 乃さあつきのねひえ 巻る 園友
 赤山雲 笛の巻のたつ 風も巻いて 大川
 白角力 又捲つて 巻へらり 砂 二松
 拾 枝の巻のちの巻を 巻か 友五
 ち 巻 ちんくく 巻を 巻る 柿下

雑ひな 戒名走つておる名人 沾蓬
、 川ひな 名をぬく 瓜 茄 芋角
十七さか 名をぬく 抱く 良のわやうがむ 非琴

△雑のわを季に活する所

白茅う おうくと秋守坊の山古位 小枝
萩のさくおうと山を合するうく 曲音の扱ひ一返
限之必まぬるあうにさるよを此おうくと杜母麻
おうくと柳櫻あうとあう用る人あり始用し
手拍あれとも再用あふ加あむ 東 秋守坊より
友 兼存のうくも今花の杖 桂石
うくきを括くうく子細あり

山琴 白茅の玉の芙蓉をまよ居て 又新

東 玉の芙蓉の香の名目あれとも不句は極わぬて
芙蓉を南キよ用くまのよ白茅よ季を括せ
これ芙蓉の雑うと極わの雑を括るう 文
東 柳木を秋の連ふ芙蓉を括あう古抄は新

極わは極手とや凡て雑とあさる位ありむ季を
わく二るさるさるやばら 絵の月味の花は極く

△冬 他季を南キよ活する所

ひさ 月おる所まのあ乃天行 正秀
你 君はさう 残る 杖 酒を

△同 季を活する所

後冬 一と名の仕るゆまよをまきて 二海
句、 柳の仕るるまのあうと 許六
夕負キ さあううつむとあの子さう り角
本お、 子ぬくく多くは竹のおさる 亭年
東山 柳のあふれともう柳く 子結
東山 柳のあふれともう柳く 子結
大山 柳のあふれともう柳く 子結
そのま声 証もねむし声てしてとる 位里

史今中終 四季の三句まへさやのう

昔より古法の流法も同キハ考まの定法を
おつておわるまて三句つておわるさるへさう

今の仏社の作法は去林の二百四の辰支を二
二百多れと矢草の季草の隣に^{支草}何の支草
されしを百司の法にえよる式にて連舞の授と
いうふきまもあはれ授てキとキの授まあるも百司
の授の宮あつて今よりカ仏と授て今月
花の授のせよきまも月林の即ちやきうられた
カ仏の今二む二月も授むと宗祇の授の勅免
を古例よりて古例の何の門人の儀にされき
況や今の授の二む二月に於て乃守授む
去林の季草よりて或る二むよりなる辰支
きのキも一むより二むより限て同キに授むと
と宗祇へまやされむある授て今より其法に常
季の用とひま後の死に宮あつて去林に決て
なるすくえまに決て二むより一月に於て
て去林とる授て今月の死に宮あつて
其キに二むより授むや何今月林と授て

むあま書を授て今より其去林の二百四の辰支を二
むけ武の天えあるは書を授て今より其法に常
そりや連舞の宮に授て去林と二むと宮
何の名所の授て今より其法に常
なれ去林も二むの古例あつて今より其法に常
法も二むを今より其法に常
何より授て今より其法に常
能力の者法あつて今より其法に常
の何あまも授て今より其法に常
い其法に常
うして用さる何の法に常

授て今より其法に常
の法に常
授て今より其法に常
授て今より其法に常
授て今より其法に常
授て今より其法に常

務の者法いこふ季言不自立ある修用て三
去の略式いこふ依不能傳より用さる付は後
法を破る衆を更祖よぬすれい發して改革せよ

△ 雑カ行去に流

草 谷水の思エセウけて花後 里言

ハミキ 蕨久のけよ ねく吹連 里取

キモ 孤乃よむくの弛之の夢後 表取

風の拍子よ博も一さー 仲志

箱のカ仙よキカ八出るあれい熱カよ十六あさき
ちろく傍て勢古老よ季も多き氣物も頻よ
出さでい生雁白作よ自在をゆる付あさむ又
季のたよ更記さうーい月花とよ竹よ志を
あらの又立もうらて各番事あうさむい
及らの行ゆるさよ考られていささうー

□ 雑

唐三 和身の集よ雑と字數あり雜併といふも

あて連記も更えを傳う今も他記よきを評
する所々雑の不白い節の用うては季の部立の
曲をよといふ・今概するよ名あよ雑の不白とい
ふよ更風の名を出や更風信を橋一松又菊キ
を括もむとする付は感い必極あさう 又約

夕三 先所あ付定よ神祇歌お契哀揚お言
本情歌お意様名はホの白い雲の格あさむわ
そを更りたむとあへともあさくふあうとさ

冬三 更雲キの白といふよニッあーッの表後表裡
季とるよさおあーる言の心はさ又初よ季言
といふよ一白よ季とるるああー様の面は白さ

去末の雜二件ありといふを更さ抄る今二件
はて雜雜体キキ格と三原よ名を分り
是本虫の弟より後まゆりもの

△ 雑 表裡季あささう

名不 新おさを誰ねあさ斤ん 翁

名不 格立や文殊のちきを巻くは 支考
 衣 衣きうてあけの款ふか 去来
 き 菅笠の草まぬれてあふおふ
 名 祥よき名のふや衣の山 考
 寄 後まらん年よりもし糸舟
 頗博 又と名後を衣のふたぐ 秋房
 衣箱 若あふの白の握持を杖突板を落座
 引んてあきまをの白の麻と下推まん信を
 斤んは衣をよそを居るわお

△かくしつらん昔きまおちか 雅只のよそを
 居るとしつらんあるへまやア行板し

△雅件 妻あてキの用きまし
 名不 鴨年角より分よ後へゆふ 三羽

△本庄子と垂觸の両玉をたて原氏と其境は居る
 柱とつるたより必考れぬぬはの帯キより
 拍すはちを雅件とひて衣の格もあふ

夜あ ねい考 熟くあつてもきたし 考

△吉三 三席の三福して及ねは 熟せよせるのく若の
 白作の形容あつむと其世は居浅めて雅件とあふ

△垂季格 季の初居るさし
 筆 ちこやまのまきる格の面 三羽

△本庄格 三季の格は白の南季の初あつてもその
 季とつらゆる白作さし

△吉三 五文字と三季のまのああつて格ふる案の
 初あれいさきも雅件名いむ或は三季の格とや
 いむ松竹の雅といひ雅件といひ三季の格と今も秋
 製うてはまの今の化社の名目といひ(ま)

△格外 廿五条衣あおは三季格と奉くれと雅
 件は珍しくは本考を委えさるぬて度よとや
 いそむト事定よきるぬ始て本考のまを引るぬ
 結文よ三層よ分るるあふと三季格は名ま定
 たり「」の文を除てする時は念ぬて格外奇

傍若無人のおと見え僅五丁の冊中ニ此不
字表ニ見事ありア其迷いらくきわら

歳旦 卯の秋も及こしれり 嫁う君 牛角

、 君の代もあやや物世家の福深寿 洋云

△キ角を嫌うと稱してその嫌いと云ふは

陰あつてあやや物世家の布袋福深寿も若

そ見佳なる風情もあれも初春の旦といひてめで

と云ふ敬あつては畏入て吾季の味を察知す

草 福立て徳うささの百和うか 牛角

善なる扱ふ数あり是を格外雜件に入らるる

花丸 ちく乃ちちくさの笑しき さよ

三むのちりるを憐むり善の心と評あり

いさよめて評き人の怒あをみめて

笈 敵の杖は志あふのさう糸 箱

、 世の中いさよ宗祇の舎糸

是附の古きなご吳中一冊と云ふはトありき

附は此附の趣向とありよの中は附は附の付と
ありて白き字世の教態とありて蓋は再案ら
けおあは譽する季を評する所はモ 吾季は格と
其ふもそののこ作の一件也

△四半格

七浦や雪の敷を一字りく 又新

△キ角を嫌うと稱してその嫌いと云ふは

陰あつてあやや物世家の布袋福深寿も若

そ見佳なる風情もあれも初春の旦といひてめで

と云ふ敬あつては畏入て吾季の味を察知す

草 福立て徳うささの百和うか 牛角

善なる扱ふ数あり是を格外雜件に入らるる

花丸 ちく乃ちちくさの笑しき さよ

三むのちりるを憐むり善の心と評あり

いさよめて評き人の怒あをみめて

笈 敵の杖は志あふのさう糸 箱

、 世の中いさよ宗祇の舎糸

是附の古きなご吳中一冊と云ふはトありき

△百字雑とあるわい同字不極

△百字雑とあるわい同字不極
[吉] 存る恨人の願ふとも老人を痛意は約あり
ともいふむは古抄い姿候の用を分たは只名目を
替るたよキとキの字はあつ多し今い其白は
又用をきり替るも替ぬもあるもろく候令替む
とも必吉候の坊去上虎守二百と二百と用替
すしとととい候い難こととあ候も同キを
出候候い今の字は及まきとむ

▲吉候初も吉と替るも一可放て難とあるわい
同キを過守候もいそ難とする不恰はあれ
その文考も能知て毎々同字難を分るもいかく虫
もい替るの口さるやさとい自注を引て候とむ

ハある種一書と志す所の名あ声 まらふ

夕テ 水由りされぬ悪くこそうき 号形

・三 ぎら難を号らまの英く 頂竿

難わくは夫先の榜よく馬 キ角

白兒 轉お一ツ又区作一 き 古々

・悠イ せけん乳母まうらる候備防 占格

一重履居るとさつくと候入意 山り

類 袴の用方たびの白さうま 考及

・十百ヒス ねれとも十自陪まのつらぬや 事候

+ せり 杜舟のなまらぬめり 土世方

化 献し一好するものよまある 良不

・お 角の角とつる可ぬさひ 風交

麻の茂もくれうとて 天世

息 舟とる浦へ移す信のさる 枕之

・ま入 白湖の伊の連きとてゆく 事之

うきとつて辱しのさうとるき 舟

冬葛 乃とわく傍親さう一と人高 岱水

風一掃さる板きもあけり 杉風

仏さくひるおの費の菊をまき 葦二

三笑 ともんの様もあはれ候とて 伯志

夕ちのつらもそれい月お 重彦

三葉 筆の伸るゝ何も懐く寸 昨子
 葉のほの口きとあれど風情を 古史
 接香 接香は古史の南都のお宿 重家
 産 産 産 産 産 産 産 産 産 産
 何もかきと守妻てゝる年 又術
 後摩後の行はうらぬ行 口十
 方恨まゝあるも否土用下 古之
 子供は何事今神の神 栗ル
 行水 手よれり水の流を待てて 遊般
 十 接よんきくはきく校長治てる ソウ
 類 類 類 類 類 類 類 類 類 類
 浄しき浄しき浄しき浄しき 侶語
 ありくくくくくくくくくく 岳波
 フ字のあつ目世のきくぬをき 東教
 ア杖風はねくお圃の小侍連 柳コ
 長師懐ておきくくくくく きの
 おまゝろはきくくくくくくく 冠枝

猫うきくくくくくくくくく け和
 ハまろわも信てゝる生む成 的
 二季おろくくくくくくく 芝柏
 内はあふ才是子の史々く 探芝
 ア 信山より川よする 夢 柳刀
 急流相く多き栗枝 鳥吹
 大風き入る天意を振あるき 石江
 けりくくくくくくくくくく 舟園
 井切まの風吹かれて 支老
 さしき人のくくくくくくく 桂舟
 接細いひきくくくくくくく 社永
 誰息葡萄を隅一色 協和
 れもいさすくくくくくくく 朱角
 周れれ白き命くくくくくく 助豊
 会松疎 降骨ー他何の旧名 不角
 小弓 けくくくくくくくくくく 糸
 高 信むくくくくくくくくく 糸

カイ印三
 七

・トリ
白丸仙 ちさきまうけて 確も内徳 せん
たし人のえれととれく 通るく 定夕

ア 鳥の居り 山守 我 望
おのゝし 出ぬ 月 川 向 舟
おのの才子 さらく けり 舟

名産 居居者のあつて 菜種 蒔けて
白磁の陶 土 月 土 伴 子 子 子
名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

名産 せん 菜種 土 何のおすき 北而
せん 菜種 土 何のおすき 北而

音 控ひんるみあはる生てあゝ 除風
読心 雨にまてるより一々ささき 去風
類 けしん世の大事やうし 又去
去 空さけらるのそけよらき 思多
葉川 春くく人のええぬまのそ 支考
百鳥 我尾の切あつ男のかく木ち
勻 能くさうれけのつ連て 存云
鳥白 若く何ちやと又るまの草 考五
けりも何多くれとつあとおく百人の信用かのそ
く千妻も化して極あ一人にこの拙をもちて
志と勵まゝ新道何人ぞ

△雑言

新言の雑言も雑言の表の内何事とも月二つあり
或は雑言のオラて多りの南キと出寸はハ米之
ひきこゝ三月月の所あり雑言のオラキ出さるるを
又よ又二也言雑言のオラ去キうて言まの
始まる所はハ米之必オラ二も言と出さるる

えりつらとも表の内一季あはるらむ

次句 遠句は雑言の長く読んて 菊

ナ言よ来てひきさ清の時を 菊

○灯んくくく心くは月 菊

ひき 衆の甲うらつ時んもせす 乙抄

只半ふん一風のつく 考

つらぬの本持仕まゝの来て り本

○独わて更の芳はき後月 昌房

斗之の風を袖中の風とてやを分さる

辨 ○月言の柳や花子奴 支考

面白き世う面白き人 考仲

候つくまのよまてや也る 考仲

不句に記きの氣おきそくさるあまに記乃

あつらる何事も無あつむかまて雑言を

つけ表の終ふ言事あつぬり沢のしよ詠お

あつぬ冬キをゆりふん語き扱く

三 他はまろく春の尻 涼ト
只今の嵐の存のありき 支考
○おのゝ只おのゝとててて 又朱
嵐の尻おのゝ水考と鳴くはあや吹し
雙とておのゝの歌おをけし

文意異抄武仙

キクナ 箱の産ぬき志へ二尺形 万子
黒車とあゝね目あり 伯志
ア十身仙十色ノ葉のむ吸て 甚二
・ 秋をわめくも雲のころく 橋舟
○信向くも島共の穴と月のみ 昨ウ
コ葉十カ仙の枝とて葉何の画と文れとカ子の
候とてい又んを白せてオとくろ お十カ仙の枝の
三月は二葉の二月カ仙とて武の始とん也
長ラ 焼きもろくも浮きの枝の字が 二
殊さく淵をまくりて 梅更
△月も作も費も程もろれもて 幸平

ハ 約為乃中ニ難も云ク 仲志
三 以既ニ難の精何と難題とて何字の
意を言ふ時とてくく反りて難はかゝく
さいとて四季の余無ある難のたは歌名ある
ちひまはあはれすもか白と揺とは歌定の二
格は用あゝむと探さく綱を張て口とと
中はれい何の字いおのつと二のちよ終てあ
いほは既おの難あむと二葉の尻浮い字りぬ
之七也 吾い出よりも年まはれ吉の山 送は
十七也 ちる名い折寸むおおま 産え
ハ 妻い程草も常のまを付て 大籠
編の花おまきむ産の掃除とて常と付く
り妻い程もむおおまといふおをちるる作
こはまの何をわしオとは妻のあもあぬも
何季を用のもはまあより揺りむる産を
へ一難のたとはまのま長引を引て季とも

難ともあるまきをけりて後設傳授
する人もあるや一歳ぬれ他社に變化自在と
宗とすれい月むの道不季の汲京おの配
号毎篇抄りて丁そ作者のふ論いあれり
も押束の正とてさする人い皆ひらきまを
賣子こと人々部破志ぬり

海印録三終

